HATOプロジェクト先導的実践プログラム部門
「へき地・小規模校教育に関するプロジェクト」
平成25年度「へき地・小規模校教育フォーラム」

Advanced Educational Practice Program about Rural Small School Education Constructed by The HATO Project in 2014

北海道教育大学では、札幌・旭川・釧路の教員養成課程３キャンパスに「へき地校体験実習」を開設しています。試行期も含め平成17年度から25年度までの受講学生は延べ1,117人を数えます。これまでのフォーラムにおいても、この実習に参加した学生による成果発表や卒業生による実習の振り返り成果を共有し、フォーラムを通して「へき地校体験実習」の運営のあり方などを検証してきたところです。

さらに、平成25年度２月に採択されたHATOプロジェクトにより、連携大学にも参加いただきながら、また、長年研究交流を続けている長崎大学にも参加いただき、本フォーラムを開催する運びとなりました。本フォーラムでは、実習の事前事後指導のあり方も含めて、実習生から実習の成果を発表していただき、今後のさらなる発展に向けた諸課題を整理するフォーラムとして開催しました。

平成26年３月８日（土）／札幌アスペンホテル ２階アスペンＡ（札幌市北区北８条西４丁目５番地）

［総 合 司 会］　廣　田　　健　（へき地教育研究支援部門　釧路校センター員）

13：30　開会あいさつ　城　後　　豊　（北海道教育大学　学校･地域教育研究支援センター長）

13：40　学生による報告

旭川校	２年	五十嵐　英　子	実習校：南富良野町立落合小学校
旭川校	２年	加賀谷　美　安	実習校：名寄市立風連下多寄小学校
釧路校	２年	高　橋　莉　菜	実習校：幕別町立糠内小学校
釧路校	２年	鈴　木　千　恵	実習校：幕別町立糠内小学校
札幌校	２年	海　藤　彩　香	実習校：利尻町立仙法志小学校
札幌校	４年	髙　橋　詩　織	実習校：士別市立中士別小学校
釧路校	３年	勝　谷　亮　太	実習校：鶴居村立下幌呂小学校
釧路校	３年	井　嶋　俊　貴	実習校：鶴居村立下幌呂小学校

15：00　パネルディスカッションⅠ

［司　　会］　西　村　　聡　（へき地教育研究支援部門　釧路校センター員）

［コメンテータ］　渡　邉　直　樹　氏（北海道立教育研究所　研究主幹）

岡　嶋　　治　氏（浜中町立茶内第一小学校　校長）

16：30　パネルディスカッションⅡ

［司　　会］　廣　田　　健　（へき地教育研究支援部門　釧路校センター員）

［話題提供者］　平　岡　賢　治　氏（長崎大学　教　授）

中　妻　雅　彦　氏（愛知教育大学　教　授）HATO連携大学

鉄　矢　悦　朗　氏（東京学芸大学　准教授）HATO連携大学

馬　野　範　雄　氏（大阪教育大学　准教授）HATO連携大学

17：40　閉会あいさつ

八　木　修　一　（へき地教育研究支援部門長）

総合司会：廣田　健（へき地教育研究支援部門　釧路校センター員）

ただ今から、HATOプロジェクト先導的実践プログラム部門「へき地・小規模校教育に関するプロジェクト」平成25年度　北海道教育大学　へき地・小規模校教育フォーラムを開催致します。総合司会を務めさせて頂きます、釧路校センター員の廣田健と申します。

まず初めに主催者を代表しまして、北海道教育大学 学校・地域教育研究支援センター長 城後 豊からご挨拶させて頂きます。よろしくお願い致します。

開会あいさつ

城後　豊（北海道教育大学　学校・地域教育研究支援センター長）

皆様こんにちは。今ご紹介を頂きました、北海道教育大学の理事で城後と申します。よろしくお願い致します。

紹介の中にもありましたように、学校支援のセンター長でもあり、HATOのセンター長でもございまして、色々と兼ねている状況でこのフォーラムに参加させて頂いている状況でございます。

本日はおそらく遠くは長崎、愛知、大阪、東京からご協力の研究同人の先生方、ここに沢山お集まりになりまして、札幌や北海道はまだちょっと春が遠い状況でございますけども、これも季節感が北海道だということで、楽しんで頂ければいいかと思いますので、よろしくお願いしたいと思います。

皆様には年度末のお忙しい中にご参会頂きまして、本当にありがとうございます。例年このフォーラムは、釧路校キャンパスを中心とした、へき地小規模校の八木部門長を中心にした、いわゆる札幌校、旭川校の教員養成の計画養成をキャンパスでこれを支えてきた経緯がございます。ご存じのように北海道というのは、先ほど道研の渡邉先生にお聞きましたら、40％近くがいわゆるへき地校であり、複式校はそのうちの20％が該当するということで、非常に教育研究課題としては大事な仕事があります。特に我々の大学というのは、教員養成を目的としていますので、今大学も中期目標計画等々の中で、北海道地域に機能するような学生を育てて、輩出していかなきゃいけないという責任と役割がございます。

また、昨今、教員養成のミッションの再定義というのが今ございまして、大学改革プランという、非常に教育に対する１つの、文科省をはじめ色々な地域も、また、社会も関心を持ってるということでございます。我々の北海道教育大学も教育改革の最中にございまして、教育の機能強化と資質の保証をどういうふうにしていくのかという辺りが大きな課題になっています。とりわけ、このへき地・小規模校につきましては、北海道教育ならではの特色を持っているわけでございまして、それをここでフォーラム等々で色々課題を明確にしながら１つの成果を上げて、それを現場へ、また、全国のそういうへき地、もしくは小規模校等々

【城後 豊センター長】

への普及を図っていくという使命があるような気が致します。そういう意味では、ここにお集まりの方々に非常に感謝すると共に、今までの成果が地域においては、釧路校の取り組んできた１つの成果が、非常に高く評価されているという自負がございます。そういう意味ではへき地教育研究支援部門が取り組んだ23市町村57校の協力校の支援を受けて、このフォーラムが今日開催されます。学生達も150名近くが実習で出かけて行って、色々な地域の校長会や市町村や教育委員会等々にお世話になってることでございます。高い席ではございますが、ここに各教育関係者の方々には大変深く感謝をするとともに、お礼を申し上げないといけないということがございます。よろしく今後ともお願いしたいと思います。

今年度は、パンフレットにもございますように、愛知教育大学、それから大阪教育大学、そして東京学芸大学、そして本学、その頭文字を取って、HATOプロジェクトという連携協同実践教育の機構を作りまして、文科省から外部資金を取りながら進めているプロジェクトでございます。その一環として共同開催みたいな感じでやっているということでございますので、ご承知おき下さい。

HATOについてはなかなか慣れない、今までにない概念が少しパンフレットの中にも書いてございますように、いわゆる先程から言っている、教育研究の大学改革プラン、もしくは中教審等々の課題を受けて、それを先導的に改革していくっていう１つの使命がございまして、そういう意味ではある程度大きい組織の教育大学の４大学が集まりまして、教員養成の指針を出していくというか、方針を出していく。その中のプロジェクトとして、このへき地・小規模校のプロジェクトが、我々の大学の中で注目を集めているということでございますので、今日のこういうフォーラムの成果が、反映されていくことは間違いないことでございますので、是非、忌憚のないご意見とご指導をお願いしたいと思います。

一方で我々の使命としては、ここに学生がこれから発表しますが、その学生の皆さん方なしにはこの教育実習、またはへき地実習等々の実践課題というのは、なかなか明確化出来ないところでございますので、是非学生の皆さんは

深呼吸をして、周りはおじさんとおばさんばっかりですので、新鮮な意味で自分のやってきたことを自信を持って発表して頂ければ結構かと思います。そういう意味では教員養成の大学としましては、人材育成というのが使命でございまして、本学の卒業生が北海道の多くに奉職していくんですけども、北海道の教育っていうのは、お前の所の責任だと。学力低下も体力低下も北海道教育大学がしっかりしないから、非常に困難な状況に陥ったと、よく批判を受けるわけでございます。しかし、決して私はそう思ってなくて、若い教師達がこれから外へ出て行く時にこういう経験をしながら、こういうフォーラムの中でやってくれることを期待していますので、どうぞ自信を持って皆さん方、発表してもらいたいということでございます。そういう学生諸君とフォーラムが一緒となって、指導者や教員達と一緒になってこういう場が出来ることも、このへき地・小規模校実習の魅力でもございますので、そういう点でご理解の程よろしくお願いしたいと思います。

全国のへき地・小規模校は、いわゆる離島等々も含めて大変な課題を抱えているわけでございます。是非北海道の特色を全国に知らしめる意味でも、このフォーラムの意義が非常に大きいものであると思いますので、私もこの北海道の豊かなこの大地で育む１つのへき地教育、もしくは小規模校の教育が、全国に伝播していくような、また、発信出来るような力量を持ったフォーラムの成果を上げていきたいっていうのが、１つの願いでございます。この今日の半日間、色々と先生方のご指導を受けながら大学の改革を進めていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。よろしくお願い致します。

総合司会：廣田

次に本日のプログラムを簡単に説明させて頂きます。この後学生による報告は６つの実習校からございます。その後パネルディスカッションでは、この学生の報告を受けましてコメンテーターの方にお話を頂き、そして最後にHATOプロジェクト及び、同じような課題を抱えております長崎大学から、この実習と取り組みについてご意見を頂きます。

尚、皆様にお渡ししました資料の袋の中に、このような質問紙がございます。学生の報告をお聞きになりまして聞いてみたいこと等がございましたら、記入を致しまして、14時40分の休憩時間の時に提出頂きますと、それを元にしながら次のパネルディスカッションで反映させていきたいと思っております。

それでは最初のプログラム、学生による実習報告を行わせて頂きます。この後の司会は阿部二郎先生にお願い致します。よろしくお願いします。

学生発表司会：阿部

皆さんこんにちは。本日の学生さん達の報告会の進行役を務めさせて頂きます、函館校の阿部二郎と申します。どうぞよろしくお願い致します。

早速ですが、既に総合司会の廣田先生の方からお話がありましたけれども、本日はへき地校体験実習を受講した８人の学生さんによる、６つの報告を予定しております。先程、廣田先生が申し上げたプリントがお手元にあるかと思いますが、発表順は１番から６番と順番に行いますけれども、１番目から５番目までは１週間の体験実習の報告になります。６番目については２週間の体験実習の報告です。

それから進め方については、１つの報告につき10分間を目処として行わせて頂きますが、もし早く終わった場合でもこの時間の中では質疑応答は行いませんので、そちらのプリントの方に是非、質問文、感想文をお書き頂ければと思います。それではまず最初の発表になりますが、旭川校の２年生、五十嵐英子さんの報告をお願い致します。

学生による報告

〔報告者〕五十嵐英子　旭川校２年次
実習校：南富良野町立落合小学校

こんにちは。北海道教育大学旭川校生活技術教育専攻２年の五十嵐英子と申します。これから発表させて頂きます。よろしくお願いします。

私がへき地校実習Ｉで、南富良野町立落合小学校で実習をさせて頂きました。初めに私がへき地校実習に参加を希望した１番の大きな理由なんですが、将来教員を目指すに当たって、へき地教育とはどのようなものなのか、また、教師の仕事とはどのようなものなのかを学びたいと考えたからです。また、本実習に向けてのステップとして、実習というものがどのようなものなのかを知りたいと考えたからです。子どもと触れ合う機会が欲しかったという理由も挙げているのですが、教師になりたいと思って大学に入っても、ボランティア等自分から何かを探し進んでいかなければ、普段の生活の中で子ども達と交流出来る機会は多くありません。その中で今回のへき地校実習は、子ども達の実態を知り、どのように関わっていくかを学ぶことが出来るいい機会だと思ったので、参加をさせて頂きました。

次に私が実習を行わせて頂きました落合を紹介したいと

【五十嵐英子】

思います。まず落合は南富良野町の南東部に位置し、地区のほとんどが森林で占められています。夏はラフティングやカヌー、冬はカーリングにクロスカントリースキーと、様々な自然を生かした競技が盛んです。地域外から買い求める人が沢山来るほど有名なカフェが幾つかあったり、エゾ鹿肉を使った地域の料理を振舞う料亭等、地域の食材を生かした美味しい食べ物が沢山あります。そして何と言っても、子どもから大人まで地域愛が素晴らしい地域です。落合小学校は大きく、力強く、明るく、生き生きと、という経営方針を掲げており、今年で開校112周年の歴史ある学校でした。全児童は、男子５人、女子５人の10人で、１・３年生学級と４・５年学級の２クラスしかありません。校長先生１名、教員２名、校務補１名と、とても小規模ですが温かい学校です。また、後で詳しく紹介するのですが、へき地校ならではの取り組みも充実しています。残念なことに児童数の減少等から今年で閉校が決まっており、子ども達は来年度から新しく出来る、南富良野小学校に通うことになります。先日、最後の実習生として閉校式に参加させて頂いたのですが、落合小学校が100年以上もの長い歴史を閉じ、地域の学校が無くなってしまうことを惜しむ地域の方々が沢山集まられており、学校がいかに地域と連携しこれまで愛されていたのか、感じることの出来る素晴らしい式典となっておりました。

次にへき地校ならではの取り組みを紹介したいと思います。年に数回行われる集合学習というものがあります。これは近隣地域のへき地校５校の児童が集まって、一緒に集合学習をするというものです。運良く実習初日が集合学習の日となっておりまして、その様子を参観させて頂きました。子ども達が授業を通して協力し合う姿、休み時間に楽しそうに遊ぶ姿がとても印象的でした。実習最終日には地域参観日があり、子ども達の保護者だけでなく、多くの地域の方々が授業を参観されていました。体育館で一緒に遊んだり、給食を食べたり、子ども達も地域の方々も私達もとても楽しむことが出来ました。また、朝のモジュールタイムといって、毎朝15分全児童で読書や体力作り等を行うという取り組みや、地域の方々が学校に出向いて読み聞かせを行ったり、放課後のクラブ活動の指導をしたりするという場面が見られました。これらの活動から学校と地域とのつながりの強さを感じることが出来ました。校長先生の講話の中で、地域を離れて学校は成り立たない、学校は文化の灯火である、と言った言葉がありましたが、その言葉の意味が良く伝わってくる取り組みが沢山ありました。

次に子ども達との触れ合いの時間を紹介したいと思います。とにかくへき地校の子ども達は、本当に可愛くて可愛くて仕方ありませんでした。登校するとすぐに、おはようございます、と元気な挨拶で迎えてくれ、それまでの緊張が嘘だったかのようにほぐれていきました。落合小学校のこと、友達のこと、家族のこと、時には恋愛のこと等、沢山のことを教えてくれました。先生聞いて聞いて、と駆け寄ってきて楽しそうに話をしてくれて、すぐに打ち解けることが出来ました。

このようにカメラを向けると様々な表情を見せてくれて、とても毎日が楽しい実習となりました。子ども達と一緒に過ごせば過ごすほどお別れが悲しく、最後の実習の日は涙、涙のお別れとなりましたが、沢山泣いた後の学活で、先生のことをずっと忘れないでくれる？と聞くと、うーん分かんない、とあっさりと言われてしまい、子ども達は本当に素直だなというふうに感じることが出来ました。

実習中２度の教壇実習を行う機会を頂き、私は１・３年生クラスの算数の授業を行いました。実際に授業をしてみると、わたり、ずらし等のイメージとは異なっていたり、全く指導案通りにいかず戸惑うことばかりでした。思いの外子ども達が課題をあっさり解いてしまって、全然授業がずれなかったりしたのですが、その分子ども達が一生懸命参加してくれたので、何とか授業を行うことが出来ました。複式の授業で片方につけない時間があるからこそ、指導を明確にする必要性というものを感じました。よりよい授業にするために子ども達との日頃の関わり方や、子ども達の豊かな発想を生かし、広げていけるような対応力が大切なのだと教えて頂きました。指導案作り等大変でしたが、最後には授業を考えながら、あの子だったらこの場面でこういうことを言うかなとか、皆楽しんで授業を受けてくれるかなと、子ども達のことを想像しながら楽しんで授業をすることが出来ました。来年の教育実習前に、授業と休み時間でメリハリをつけて子ども達と関わっていかなければならないことや、授業を行うにあたって必要な対応力を身に付けること等、自分自身の課題を見つけられて、とてもいい経験となりました。

１週間、南富良野の宿舎に暮らしてみて、過酷な実習生活を乗り切るためには、食事は本当に大切なのだと実感しました。また、月曜日には集合学習後に懇談会があり、地域、５校の先生方と沢山お話をさせて頂きました。北教大出身の方が多く、様々な話を伺うことが出来ました。そして何と言っても実習期間中は、実習記録や指導案作りに追われ、寝不足の日々が続きます。教師という職業は本当に体力勝負なのだなと実感しました。日頃の生活を見直す良い機会となって、とても良い１週間となりました。同じ実習校の友達等と夜にリフレッシュするために散歩に行ったりとか、沢山助け合った中で１週間乗り切ることが出来ました。

今回の実習のテーマとして、へき地校の実態を理解すること、教師の仕事を体験すること、子ども達との関わり方を学ぶという３点を挙げ、１週間を過ごしました。その中でへき地校特有の地域と深く関わり合った取り組みや、実際に子ども達に先生と呼ばれることの喜びや責任、そして何より自然の中でのびのびと元気に学び、元気に遊ぶ子ども達と出会うことが出来たのが、本実習の１番の収穫となりました。子ども達を１番に考えることが出来る教師になりたいと、切実に思うことが出来るような生徒達に出会うことが出来たのが、私としては１番の成果なのかなあと感

じました。

へき地校実習を終えて振り返ってみると、素敵な地域、人々との出会いがあり、日々過ごす中で子ども達のためなら頑張れる、子ども達のために何かしたいという確かな気持ちを味わうことが出来ました。また、先程述べたように、来年の教育実習に向けた課題も見えてきたり、何よりも教師になりたいという強い思いを抱くことが出来ました。へき地で過ごした１週間は今までの人生で１番充実していて、沢山のものが得ることが出来たと考えています。

最後に、今年度で閉校してしまう落合小学校ですが、このような機会に落合小学校の良さや、私達が学ぶことが出来たことを皆さんに伝える機会を得ることが出来、本当に良かったと思います。ご清聴ありがとうございました。これで発表を終わらせて頂きます。

学生発表司会：阿部

ありがとうございました。10分きっかりでした。引き続き、２番目の発表に移りたいと思います。準備よろしくお願いします。

それでは２番目の報告は、同じく旭川校の２年生、加賀谷美安さんの報告になります。よろしくお願いします。

〔報告者〕加賀谷美安　旭川校２年次
実習校：名寄市立風連下多寄小学校

北海道教育大学旭川校国語教育専攻２年の加賀谷美安と申します。つたない発表ではありますが、最後までお聞きして頂けると幸いです。

私は平成25年９月３日から６日まで名寄市立風連下多寄小学校へ、へき地体験実習に行ってきました。下多寄小学校での４日間は、私にとってなかなか経験することの出来ない価値ある４日間となりました。この４日間を通して学んだこと、感じたことをこれから述べていければなと思います。

まず私は実習に参加する前に、実習で学びたいことを３つ考えました。１点目は教師の授業の準備についてです。小規模校、大規模校関係なく授業の準備っていうのは、どういうふうにやっているのかということも勿論、興味はありましたが、それだけではなく、へき地だからこそ必要な準備等はあるのかどうか、という点についても学びたいというふうに考えました。２点目は授業以外の教師の仕事についてです。これまで私は12年間児童、あるいは生徒として教育を受けてきました。しかし教育をする立場と教育を受ける立場では見ている物、見える物が違うということは、たった少しの知識しか持たない学生の私でも予想出来ます。そのため、教育をする立場として教師の仕事ってどういうものなのか、更には、へき地校ならではの仕事というのは、どういうものがあるのかということを見たいなというふうに考えました。３点目は子ども達とのコミュニケーションの取り方についてです。私自身、人見知りということもありますが、教師はどのように児童と距離を縮めていくんだろうかということを疑問に思いました。そのため、実際にどのようにコミュニケーションを取っているのか、実際見て学びたいというふうにも考えました。以上３点が私が実習で学びたいこととして考えたことです。

【加賀谷美安】

では次は、実習先の学校について説明させていきたいと思います。私が実習に行った名寄市は地図で見るとこのような場所にあります。上川管内にあって、旭川よりも少し北にあります。車で２時間かからないぐらいです。その多寄市の中の風連地区という所に、私の行った風連下多寄小学校があります。では校舎はどのようなものかというと、このように非常に綺麗で、初めは学校というよりも、凄く最近に出来た公民館のような印象を受けました。しかし、このような綺麗な校舎ではありますが、平成25年度で開校112年を迎える、歴史と伝統のある学校でもあります。この学校の学級編制はこのように全校生徒８人となっていて、教職員の人達も全部で６人という構成です。

次にこの学校で行われていた授業について説明していきたいと思います。この学校では複式の授業を行っていました。２年生のクラスと５・６年生のクラスでは写真のように、わたりとずらしを行いながら授業を行っていました。初めて複式の授業を見学させて頂いたので非常に驚きました。授業をしている先生方はわたりとずらしのタイミングが非常に絶妙で、時間が余ったり、やることが余ったりする時間がほとんどありませんでした。私のような立場の者が言うのはかなりおこがましいのではありますが、これが本当のプロっていうものなんだな、プロの教育者ってこうことなんだなっていうふうに感じました。また、それだけではなくて、相当時間をかけているんだなということも感じられました。右下の写真で教室に模造紙が貼ってあるのが見えるかと思うんですが、このクラスでは黒板をあまり使用せず、模造紙を中心に授業を行っていました。模造紙にあらかじめ書いておくことで時間を短縮をすることが出来、わたりとずらしが上手く出来るという効果があるそうです。また、この先生は放課後児童が帰った後、教室でこの模造紙を教室中に沢山貼っていました。これは模造紙を使うということは、かなり枚数が沢山使われるかと思うんですが、人数が少ないことで字が小さくても児童が見える

かと思います。だからこそ模造紙を使って授業が出来て、その模造紙を実際に教室に貼るっていうことが出来るのかなというふうに思いました。これも少人数だからこそ行える授業の方法なのかなというふうに感じました。また、教室には５冊の辞典が置かれていました。その辞典には多くの付箋が貼ってあり、沢山の言葉も書かれておりました。１人１冊辞典が与えられていて、覚えられなかった言葉や分からなかった言葉を直接自分で調べて付箋で貼っておけるという、こういう環境も少人数だからこそだなというふうに感じました。

私が見た教師の仕事はそれだけではありませんでした。先生方は少しでも時間が出来ると職員室で授業の準備であったり、ノートの点検をしていたり、また、行事の予定を立てたりと、校務の仕事も沢山行っていて、時間を余すところなく使っているという印象でした。かといって、児童を勿論放置しているというわけではなくて、給食を一緒に食べながら沢山の話をしたり、休み時間一緒に過ごしたりと、児童との時間も大切にしていました。へき地校だからこそ、先程６人という教職員の人数だったんですが、やはり大規模校とは違って教職員の方々が少ない分、非常に１人の仕事量が多いなあというふうにも感じられました。４日間の実習を通して、私達も色々してくれた児童の皆さんに手紙を書いたり、色々感謝の気持ちを込めて校歌を２人で練習したりもしました。

また、今回感じたことの最も大きなことの１つとして、地域との繋がりの強さがあります。私は実習中この地域でお祭りに参加させて頂きました。私がイメージするお祭りというのは、金魚すくいだったり、綿アメを食べたりという楽しいお祭りのイメージですが、ここで行われていたお祭りはそのような楽しいお祭りというわけではなく、こういうふうに写真から見ても分かるかと思うんですが、古くから伝わる伝統的なお祭りでした。このお祭りに下多寄小学校は毎年、地域交流として参加しています。この地区の子どもは、いつもこういうふうにお祭りの服装をして舞いをするそうです。この他にも学校は多くの地域交流を行っています。地域との連携はへき地校に限らず重要ではありますが、特に地域と学校が１つになって児童を支えているような結び付きの強さ、そして重要さを感じました。

最後にまとめに入らせて頂きます。初めに複式の授業をするためには、多くの準備、時間が必要であるということを学びました。それは１つ１つの授業の準備ということだけではなくて、経験としてどれだけ複式の授業を行っているか、経験があるかということも含めてだと思います。多くの時間をかけて培っていく必要があるというふうに非常に感じました。次に教師という仕事の大きさについても学びました。教師という仕事は勿論児童に対して授業を教えたりというものですが、そのためには多くの人の助けがなければやっていくことが出来ません。先程、地域の結び付きについて説明しましたが、児童と全力で向き合うためには、地域、周りの人達とも向き合っていかなければ、児童と全力で向き合っていくことは出来ないと思います。そのため、教育に関することだけでなくて、もっともっと物事を広く捉えられるようにならなければいけないなというふうに感じました。

最後にコミュニケーションについてです。児童にとって教師の笑顔というのは、非常に児童を安心させる重要なものではないかなというふうに感じました。先程、給食の所で沢山話をしていたというふうにも述べたのですが、正直小学生の話というと、私はその小学生が先生に話しているのを聞いていて、正直どこが面白いのか全くわからないような話でも小学生はとっても沢山笑っていて、楽しそうにしていました。私は、今のはどこが笑うポイントなの？て全く訳が分からない状態でずっと聞いていたんですが、そこの場にいた先生方は良く分からないのか、本当に分かっているのか、どちらかはちょっと私には分からなかったんですけど、大きく頷いて児童と沢山一緒に笑っていました。もしかしたら中学生では違うのかもしれませんが、小学生においては、このようにどんな話でも児童の言いたい気持ち、伝えたいことと同じように、その話に合った真剣な聞き方をすることで、児童は心を開いていくことが出来るのかなというふうにも感じました。実習先の児童も勿論ですが、教職員の方々も非常に素晴らしい方々ばかりで、私にいい経験をしてもらおうというふうにしてくれていて、おそらく私はへき地校の綺麗な部分、いい部分を沢山見せてもらえたように思います。今後はへき地校の綺麗な部分だけではなくて、へき地が抱えている問題についても更に考えていきたいなと思います。以上で私の報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。

学生発表司会：阿部

ありがとうございました。10分ぴったりでした。それでは３番目の報告に移りたいと思います。準備お願いします。

次は釧路校２年生の高橋莉菜さんと鈴木千恵さん。共同報告ということになります。お願いします。

〔報告者〕高橋　莉菜・鈴木　千恵　釧路校２年次
実習校：幕別町立糠内小学校

北海道教育大学釧路校２年生の鈴木千恵と高橋莉菜の方から発表させて頂きます。よろしくお願いします。

私達は１週間、幕別町立糠内小学校で実習をさせて頂きました。まず、糠内小学校の概要についてです。教職員は合わせて９名、全校児童は計19名となっています。地域の特色として、糠内とは幕別市街から15キロ程南に位置しており、酪農、畑作が盛んな地域です。糠内神社の秋祭りには獅子舞が出され、糠内の開拓にまつわる伝統が今も地域の人々に受け継がれています。平成16年から糠内小学校の児童も秋祭り及び公民館祭りにおいて、子ども獅子舞も披露しています。

次に周辺の環境についてです。小学校の近くには農協がありましたが、閉店時間が５時と、とても早いこともあり

【高橋莉菜・鈴木千恵】

まして、一度も利用しませんでした。そのため買い物をするには教頭先生が車を出して下さって、帯広まで行って買い出しをしました。お店はほとんどないのですが、最終日に３人で散歩をしていた時に、自動販売機が意外と沢山あることに気付きました。入浴の方は宿舎のシャワーで済ませましたが、ご覧の通り、とても歴史を感じさせるような宿舎になっていました。

次に宿舎の様子についてです。私達３人は１週間、教員住宅で共同生活を行いました。まずこちらがリビングになります。ここで３人でご飯を食べたり、団欒をしたり、実習記録の記入や授業準備をしていました。次に右下にあるのがキッチンで、朝食夕食は３人で協力して自炊をしていました。かかった費用についてはパワーポイントをご覧頂いている通りです。食費が３人で1500円程度となっていますが、この他にも教頭先生がご飯に連れて行って下さったり、最終日には先生方が、実習お疲れ様会等を開いて下さいました。

次に糠内小学校ならではの活動ということで、私達が行った時期にはこの２つの収穫祭と獅子舞という２つの行事が行われていました。まず収穫祭はご覧の通り、学校と地域の繋がりを大切にしている行事ということです。子ども達が学校菜園で作った野菜を使ったり、地域の方々が野菜を持ち寄ってくれて、それを保護者の方々、地域の方々、そして子ども達、先生方と調理して収穫祭の行事を行いました。保護者の方々や地域の方々が子ども達に野菜の切り方ですとか、調理の仕方を教えているという姿がとても印象的でした。獅子舞なんですけれど、今年はちょっと都合が合わず、私達は練習を見に行くことが出来ませんでした。しかし毎年子ども達は熱心に取り組んでいるということで、今年も放課後に練習しているんですけれども、子ども達は一生懸命練習しているよ、という報告を受けることが出来ました。

次に子どもとの触れ合いということで、休み時間はドッチボールや鬼ごっこをして、全学年で遊んでいました。中学年、高学年の子ども達が低学年の面倒もしっかり見ながら全員で楽しもうという姿がとても印象的でした。

次に観察実習で学んだことです。大学の講義等で少人数なので、手厚い指導が出来るというメリットは知っていたんですけれども、実際に見てみると、複式のわたりやずらしのタイミングですとか、１時間の授業で２学年分の授業を構想するということの大変さを実感することが出来ました。現場に入ると、私達はこれを毎日５、６時間分構想しなければいけないという大変な面を感じることが出来ました。フィールド研究では学ぶことの出来ないことを学べたので、非常に貴重な体験が出来たなと思っています。

次に教壇実習についてです。私は１・２年生のクラスを担当し、単式で計４回授業をさせて頂きました。初めは、自分が授業を行うことが出来るのか、上手くいくのか自信がありませんでしたが、指導教官の先生のご指導を受けながら、自分なりに挑戦することが出来ました。研究授業では単式で１年生の算数で３つの数の計算を行い、子ども達が興味を持てて、分かりやすくなるような教材作りや事前準備に力を入れました。実際に授業を行うと子どもの考えをどう引き出すのか、また、子どもがつまずいてしまった時、臨機応変の対応をすること等、課題が沢山見つかりました。しかし１週間を通して授業を重ねていく中で難しさを感じると共に、教えることの楽しさも実感することが出来ました。

私は中学年３・４年のクラスで教壇実習を４回させて頂きました。パワーポイントでは研究授業について書いてありますが、この他にも単式の授業で算数の授業を３回やらせて頂きました。研究授業の社会では私も地元が十勝ということもあって、子ども達と共通したテーマで授業を行いたいと思い、書いてある通り十勝マップを作ろうという授業を行わせて頂きました。授業の中ではクイズ形式を取り入れて、市町村当てクイズを行ったりですとか、ペア学習、新聞記事を使って市町村の特徴を探してみようという、調べ学習を取り入れたり等、１時間の授業の中で沢山のことを盛り込んでしまったんですけれども、最後は私の想像を遥かに超えた十勝マップというものを作成出来たので、本当にこの授業をやって良かったなと感じることが出来ました。また、子ども達の喜んでくれる姿が私の自信にも繋がったので、授業をすることの楽しさも強く実感することが出来ました。

もう１人の実習生の棚橋さんは高学年を担当し、研究授業では５・６年生の国語で、登場人物の気持ちを音読に表現しようという単元を行いました。

最後に実習を通しての感想です。１週間教員住宅に泊り込みで通勤をするということで、将来自分が教員として働くような生活のイメージを湧かせることが出来ました。また、今回の実習で収穫祭等を通して、糠内の地域全体で子どもを育てるという雰囲気が大変伝わってきました。地域の協力があって学校が成り立っているし、反対に学校があるからこそ、地域全体にまとまりがあって元気でいられるのだと感じました。また、私自身がへき地小規模校出身のため、糠内小学校のアットホームな雰囲気を懐かしく感じましたし、いつか自分もこのような学校へ戻って子ども達

と関わりたいと、強く感じることが出来ました。

実習を通しての感想です。私は鈴木さんとは逆に、大規模校出身だったので、正直将来自分が教員になったらこのようなへき地・小規模校で教員をやるというのが正直不安でした。この１週間のへき地実習も本当に乗り越えて行けるのかが不安でしたが、意外と行ってみると生活出来るもので、周辺には大型スーパーとかはなく、車で30分かけて買い物に行かなければいけないと、やはり交通の面では不便なところもあるんですけれども、学校に行ってみると、子ども達や先生方が私達のことを温かく迎え入れて下さったり、学校に地域の方々が遊びに来て色々な話したりと、本当に糠内の良さを強く実感することが出来ました。へき地・小規模校で教員として生活していくことの良さというのも凄く実感することが出来ました。実習中は３人で共同生活となっていたんですけれども、教員になったら１人で生活していかなければならないという、そこは少し不安もあるんですけれども、この実習を通して本当に糠内小学校で実習をやって、子ども達や先生方と出会えて本当に良かったなと思える１週間を過ごすことが出来ました。将来自分は地元十勝に戻って、教員としてこのような糠内小学校のようなへき地・小規模校で、また、教員として生活していけたらいいなと強く思うことが出来ました。これで私達の発表を終わらせて頂きます。ご清聴ありがとうございました。

学生発表司会：阿部

ご苦労様でした。共同報告って難しいんですけど、時間の中に収まってました。大変立派だと思います。それでは引き続き４番目の報告になりますが、準備お願いします。

それでは４番目の報告です。札幌校２年生の海藤彩香さん、よろしくお願いします。

〔報告者〕海藤　彩香　札幌校２年次
実習校：利尻町立仙法志小学校

こんにちは。札幌校教育臨床専攻教育実践分野２年目の海藤彩香と申します。よろしくお願い致します。私は８月26日から30日までの５日間、利尻町立仙法志小学校で実習をさせて頂きました。前日の25日に札幌から稚内までバスで行き、そこからフェリーに乗って利尻島まで向かい、８時間ほどかかりました。利尻島には小学校が２校、中学校２校、そして高校が１校あります。本当に自然が豊かなところで、こちらの写真を見てお分かりの通り、私が行った仙法志小学校も美しい海に面して建てられていて、天気のいい日には利尻富士の頂まで見ることが出来、毎日学校に行くのがとても清々しく気持ち良かったです。

仙法志小学校について少しお話しますと、1･2年、3･4年、５・６年が複式学級となっておりまして、全３学級の全校児童が28名､教職員は計９名です｡私は１年生４名、２年生４名の１・２年の複式学級に配属させて頂き、実習初日の朝は本当に緊張と不安で仕方がなかったのですが、

【海藤彩香】

いざ子ども達に会ってみるとすぐに打ち解けることが出来、配置学級の子ども達はもちろん、他の学級の子どもも積極的に声を掛けてくれました。仙法志小学校の子ども達は本当に人懐こく、休み時間や給食、掃除の時間を通して全校児童と関わることが出来、顔と名前も自然と覚えていきました。子ども達は本当に物凄く仲が良くて、例えば落とし物があると、その臭いを嗅いだだけで持ち主が分かって、しかもそれが100発100中だと先生がおっしゃっていたので、本当に驚きました。

ここからは授業に関してお話させて頂きます。大学でへき地教育論、へき地教育指導法という講義を受けてから、私はへき地・複式教育にとても興味を持っていました。まず授業観察通してということでお話します。配置学級は１・２年生だったのですが、３・４年、５・６年の複式授業も１時間ずつ見学させて頂き、私は複式授業における教師のわたり、教師がついていない時の子ども達の様子に着目して見てみました。

初めに１・２年生の様子についてです。１・２年生はまだ複式の授業に慣れていないということもあってか、中学年や高学年ように自分達で学習をすすめるのが難しいようでしたが、教師の補助が少しあれば発表や意見交流がなんとか出来ていました。学習リーダーが先頭に立って進めるという光景はあまり見られなかったのですが、教師が側にいない状態だとだらけてしまったりするため、低学年の複式授業の難しさを感じました。また、発表の仕方や反応の仕方、話の聞き方、綺麗に書くこと、姿勢良く椅子に座ること等、低学年には教えることが本当に沢山あり、学習に関して基本的なことを子ども達が習得し、それが当たり前となって慣れていくことによって、授業もよりスムーズに進んでいくのではないかと思いました。

次に３・４年生の様子についてお話します。国語の授業を見学させて頂きました。３・４年生は比較的子ども達だけで学習を進めることが出来ていて、学習リーダーを中心に発表や意見交流を行っていたのですが、時折集中力が続かなくなってしまったりと、注意が必要な場面もありました。１・２年、５・６年、そして最後に３・４年という順で授業観察をしたので、３・４年生はやはり低学年、高学

年の真ん中、中学年だなっていうのが一番の印象でした。低学年の幼さをまだ残しつつも、高学年のようにしっかりした一面も見られる、そんな授業風景でした。

最後に５・６年生です。社会の授業を見学させて頂きました。教師が一方の学年に渡っていていなくても、指示１つあれば子ども達は自ら学習を進めていて、例えばなんですが、教科書や資料集を見て自分なりにノートにまとめたりという様子は､低学年､中学年には見られなかったため、とても印象的でした。学習リーダーの存在感が大きく、進行もとても上手でしたのでスムーズに進み、主体的に学習に取り組んでいる姿は本当に凄いなと思いました。５・６年生はそれまでの学習の経験、積み重ねがあり、複式授業への慣れ、教師のわたりに対する慣れがこうした学習を可能にしているのではないかと思います。ここで授業観察を通して学んだことを一言でまとめますと、学年で異なる難しさということになると思います。今回は１・２年の複式学級に１人、学習補助教員の方が常にいたので、担任の先生が離れていても、その先生が見ているという感じだったのですが、補助教員の先生がいない場合に低学年の複式授業をいかに担任１人で対応するか、進めていくかというのが難しいところかなと思いました。

これまで授業観察を通してのお話をさせて頂きましたが、ここからは教壇実習を通して学んだことをお話ししたいと思います。私は２年生の単式で算数の１時間授業を持たせて頂きました。授業をすること自体が初めてで、初めはどうしようという感じだったのですが、いざ子どもを前にして授業をしてみての感想は、ただただ楽しかったに尽きます。授業が始まったら緊張がいつの間にか何処かへ行き、授業に夢中になっていました。前日には10回以上は授業のシュミレーションをしようと思っていたのですが、実際にはそんな時間はなくて、やってみて思ったのは、10回のシュミレーションよりも１回の授業をやってみなければ分からないということです。実際に子ども達の前で授業をしてみると、こちらがある程度事前に予想していたとしても、それを超える反応が子ども達から返ってきたりしますし、予想外のこと、驚かされることもあり、臨機応変に対応していく難しさを感じました。教壇実習について主な反省点を２つ挙げますと、まず１つ目は全体把握に関してです。自力解決につまずいている子どもを中心に深く関わってしまったので、早く問題が解けた子どもに気を配ることが出来ず、その子に暇な時間を作ってしましました。早く出来たら他の解き方をやってみよう等の声掛をすれば良かったと思っています。２つ目は時間配分に関してです。考える時間を取り過ぎてしまったために、発表や交流の時間を十分に確保することが出来ず、少人数であるにも関わらず、１人１人の考えを共有出来なかったことを残念に思っています。時間配分は複式の授業で考えた場合も重要で、現場の先生は複式授業のポイントは、いかに上手く渡れるか、１つの学年をどこまで時間を掛けて指導し、どのタイミングでもう一方に渡るかが難しいところというふうにおっしゃってました。

授業観察と教壇実習を通して主に複式の授業についてお話させて頂いたのですが、ここで私が今回実習のテーマにしていた、へき地・複式教育の実際についてまとめたいと思います。実習前に大学の講義を受けて私は、複式授業が教育の理想の形であると考えていました。少人数であるがゆえに個別指導を充実させることが可能ですし、また、わたりの時には子ども達は自分の力で学習を進めていかなければなりません。この力は子どもにとって非常に大切だと考えていたからです。確かに今回の実習で、教師がついていなくても子ども達だけで意欲的に学習を進めている様子等を見て、改めて複式の授業の良さというものを感じたのですが、実習を終えてみて良さばかりではないということも学びました。少人数ゆえに個別指導がしやすいという点に関しましても、教師が手を掛け過ぎてしまうことで子どもも必要以上に教師を頼ってしまって、そうすると子どもの考える力が伸びず、本当の力がつかないという怖さもあります。私も実際に授業をしてみて、困っている子どもやつまずいている子どもに対して、いつの間にかすぐに声を掛けてしまっていました。

続きまして、へき地校に対して私が感じたことをお話させて頂きます。学校ってあったかいというのが今回の実習の一番の感想でして、こんなにも学校が温かいと感じたのは初めてなのですが、やはりこれがへき地校の魅力なのではないかなと思います。大規模校に比べあきらかに教師、子ども等、とにかく人と人との距離が近く、関係が濃いと感じました。子ども達はまるで仲の良い兄弟かのようで、また、教師間の雰囲気、職員室の雰囲気がそのまま学校全体の温かい雰囲気に通じているかのようにアットホームで、チームワーク連携が素晴らしかったです。全教職員が密に情報交換を行いながら全校児童を育てていて、まるで学校全体が１つの家族のようだなというふうに感じました。ちなみにこちらの写真なんですが、これは利尻に着いた時のフェリーターミナルでのお迎えの様子です。先生達がほぼ総出で私達実習生のことを迎えて下さいました。

実習を終えたということで３点お話させて頂きます。まず実習生活からですが、実習を終えて私が一番感じたのは、１人では絶対に無理だったということです。このへき地校体験実習は約１週間、自宅からではなく宿舎等で同じ実習生達と共同生活を過ごしますが、仲間とのチームワークもこの実習の鍵なのかと思います。作業を分担し協力して洗濯や料理をし、また、全校児童が少ないので子ども達の情報共有もしやすく、教壇実習に向けた授業準備も相談しながら行いました。実習期間中お世話になった宿舎の方にもとても良くして頂き、他の宿泊者の方、漁師の方や工事関係の方まで私達に温かいお言葉を掛けて下さって、いつも元気をもらっていました。本当に多くの方に支えられ、人の温かさを感じる実習だったと思います。次に教職についてですが、この実習を終えてより強く教員になりたいと思うようになりました。この先色々大変なことが沢山

あると思いますが、この実習のことを思い出せば乗り越えられると思うほど、思い出深く、かけがえのない経験となりました。子どもの分かった、という時の晴れやかな顔を見るとこちらまで嬉しくなりますし、出来なかったことが出来るようになった時は、一緒になって喜んだりしました。教師は教えるのが仕事ですが、実は子ども達から私達が教わり、また、元気や感動をもらっていて、ここに教師のやりがいがあるのではないかなと思いました。こちらの写真は実習最終日のお別れ会の時に全校児童で披露してくれたソーランなのですが、夢中になって一生懸命に踊る子ども達の姿に物凄く感動して、涙が止まりませんでした。

最後に今後の課題ですが、１番の課題はやはり授業です。ベテランの先生の素晴らしい授業も、私のつたない授業も子どもにとっては同じ１時間ですので、教師を目指すに当たって、まずは授業が今１番の課題だと思っています。また、今回は利尻の学校で実習をさせて頂きましたが、今後他の地域や規模の学校も経験して、色々な学校の雰囲気や特徴をつかみたいなと思っています。

最後になりますが、ここで利尻の思い出について少し紹介させて頂きます。まずはこちらの美味しそうなご飯なんですが、これは全て宿舎の方のご厚意で晩ご飯を頂きました。本当は自炊なんですけれども、毎日のように持ってきて下さり、地元で取れた新鮮な魚介類をご馳走になりました。一番右上の写真は、実習最終日の夜に先生方と校長先生のお宅でバーベキューをした写真です。右下の写真は帰りのお別れの場面で、フェリーが出発してからも私達はしばらく号泣していました。そのくらい本当に本当に、実習に行って良かったと心から思っています。以上で報告を終わらせて頂きます。ご清聴ありがとうございました。

学生発表司会：阿部

滑舌がいいですね。非常に分かりやすいです。ちょっと時間が押してるんですが、次、５番目の報告は、札幌校４年生の高橋詩織さん。よろしくお願いします。

〔報告者〕高橋　詩織　札幌校４年次
実習校：士別市立中士別小学校

皆さんこんにちは。札幌校４年目の高橋詩織と申します。私は中士別小学校の方にへき地校体験実習に行かせて頂きました。まず本実習には小規模校ならではの少人数体制の教育現場を経験することで、きめ細やかな子どもの関わり、学習指導を考えることが出来るようにするということを目標に取り組みました。それではこちらのスライドを使って説明させて頂きます。

まずは私が実習で行かせて頂いた中士別小学校について簡単に説明したいと思います。中士別小学校は士別市外よりも6.4キロメートルほどの場所に位置しています。農村地帯が非常に広がっておりまして、児童のほとんどが農家の子どもでした。全体として保護者の皆様がとても協力的で、ＰＴＡの活動等も地域の活動等もとても盛んな様子で

【高橋詩織】

した。学級編制につきましては、ご覧の通りなんですけども、児童数は13名で、１・２年生、３・４年生はそれぞれ複式で、５年生は特別支援の児童が１名、６年生が１名の13名です。教職員の方々もこのような形になっていて、教頭先生が３・４年生の担任も兼担していました。私ともう１人の２年生が実習に行かせて頂いたのですが、私は３・４年生を担当させて頂いたので、教頭先生に実習の担当を持って頂きました。校舎自体はとても歴史のある建造物でして、窓の桟が木の枠であったりとか、年季の入ったストーブであったりとか、見慣れない物がとても広がっていました。このような形です。

授業参観の様子に移りたいと思います。１週間の授業実習を通してです。１番小規模校の感じる点というのが、全校の合同の授業というのでした。授業の教科っていうのは様々で、音楽であったりとか、外国語活動であったり、図工であったり、体育であったり、朝学活等様々で、その中で先生方は１年生から６年生まで興味を持って取り組めるような課題を出すことで、１人１人に合った学習を展開していました。そのため１年生と６年生でそれぞれ全く発達段階が違うものの、同じ場でそれぞれの学びというものを共有することが出来ていました。こういった授業を基本としながら学校全体で雰囲気や教育活動、子ども達の素直で明るく前向きな姿が形成されていってるんだなということを実感することが出来ました。また、次に複式授業なんですけれども、複式授業についても、私が配属させて頂いた３・４年生では、３年生が４名、４年生が２名の複式学級でした。授業では勿論、直接指導時と間接指導時があり、特に間接指導時に教師の指示なしに児童が自ら判断し、活動している様子にとても驚かされることが多くありました。自力解決時にも教師の関わりなしに、子ども達の授業の中のこうした学習ルール等に学級経営の工夫を見ることが出来ました。

こちらの写真にあるものなんですが、こちらは総合学習で自分達で育てたジャガイモを収穫して、そこから澱粉を取って、くず湯を作るという体験学習を行っていました。農家の子ども達が多いという話は先程させて頂いたんですけれども、その中でもなかなか経験出来ない子ども達はと

ても興味津々で、こういった体験学習が行えることもへき地校ならではの魅力だなあというふうに感じました。

次に私がさせて頂いた研究授業についてお話させて頂きたいと思います。私は３・４年生の３年生は重さの分野、４年生は面積の分野をやらせて頂きました。１つ目は、指導案作成時にあたってなんですが、３・４年生の中でまずはわたりずらしの構成が間接指導時でも課題の量や時間配分が適切か、わたるポイントは適切か等を事前にご指導頂きました。また、評価についてなんですが、１つの授業の中に何度も評価をする場面というものとを盛り込んでしまうと、なかなかそれを評価する時間がないということを教えて頂き、また、間接指導時には評価することが出来ないため、直接指導時の評価が望ましいということを教えて頂きました。導入部分では適切な教材の示し方等、授業作りの段階で多くの指導を本当にして頂きました。２つ目になりますが、教具について、まず３年生では重さを量るという授業をやらせて頂いたので、どんな秤を使って、何を量らせるかということが凄く重要になってきて、それによって授業のねらいも決まってきてしまうため、教具を決めるということで凄く苦労をしました。事前実験ということで、事前に何度も秤の調整も行って重さも量ってみたんですが、実際の授業の時には子ども達に実際に間接時に量らせてみると、目盛が多少ずれてしまっていて、子ども達をちょっと混乱させてしまいました。その時は改めて念入りな準備が必要であったなというふうに痛感しました。

４年生ではこちらの写真にもある通りなんですが、面積の導入時にどのような教具で考えさせるかということがとても重要であると先生に教えて頂き、とても悩みました。多様な考え方を起こさせたかったので、興味を引きつけるような導入にしたいという思いから、色々な方法を考えましたが、面積が広さであるというイメージを持たせなくてはいけないという部分で、非常につまずいてしまい、一度教科書に立ち戻って考えて作成を行いました。また、中士別小学校はとても実習に対して素晴らしい対応をして頂いたので、前日に全校の先生方が模擬授業をして下さり、活動、指示等に関わる指導技術のアドバイスをして下さいました。

３つ目になりますが、活動指示についてです。複式の授業では特に、間接指導時の前の活動指示というのがとても重要になるということを実感しました。活動中の児童の様子を把握するということがとても困難なので、児童が自力で解決出来るように、明確で簡潔な活動の指示が必要であるということが分かりました。間接指導時には子どもどうしが教え合ったりとか、やることが終わってしまった子達はプリントをやったりするのも、学習ルールで凄く助けられたなという印象があります。

４つ目になりますが、板書についてです。私は模擬授業をさせて頂いた時に、ついつい焦ってしまって凄く速く書いてしまったんですが、その時に先生に、子どもは先生のスピードに合わせて書きたがるから、先生がそんなに早く書くと子ども達も汚い字でバーッと書いてしまうよ、ということを教えて頂き、ゆっくり丁寧な字で書いて、子ども達にも綺麗に書くという癖を身に付けさせる必要があるよ、ということを教えて頂き、それが凄く私の中で印象に残っています。

５つ目になりますが、見通しを持たせる場面についてということです。これが私が実際に授業をやってみて、１番難しかったなと思った場面でした。と言いますのも、小規模校ということもありまして、児童数もとても少ないため見通しを持たせるという場面において、子ども達の考えを１人沢山出さなきゃいけないということがあって、実際にやってみると児童からなかなかその考えというのが浮かばなく、凄く沈黙という時間が続いてしまいました。その場での手立てとして、既習事項を想起させるような言葉掛けをするということが教師にはとても大切だということが分かり、その後の反省会の中から先生方から既習事項を把握することや、系統性の把握がとても重要であるよということを教えて頂きました。これが私にとって教職に就くまでの自己の課題として見えてきた部分でもありました。

これが実際に量っている場面です。休み時間、放課後ですが、子ども達が考えて準備をしてくれた全員遊びや、屋内での遊び、剣玉やマジックを披露したりしました。中庭にはぶどう畑やどんぐり畑等もあって、皆で遊びに行って取って、その場で食べて等をやって、このようなこともへき地校ならではの魅力だなというふうに感じました。

次に給食や掃除です。給食や掃除は共に縦割り班での分担でした。ここでとても印象的だったのが、中学年や高学年の子ども達が低学年の子ども達をとてもサポートしていて、こういうふうにやるんだよとか、お兄ちゃんお姉ちゃんが凄く引っ張って、下の子達は、お兄ちゃんお姉ちゃん達の真似をしてという感じで、学び合い、助け合いの様子が見られたことが凄く私の中では印象的でした。これも凄く小規模校ならではの良さだなというふうに感じました。給食準備の速さというのも、これも縦割り班の中で中学年、高学年のお兄ちゃん達が、それはそっちに持っていって、というふうに指示をしていて、そのお陰でとても早い給食準備になっていました。

最終日に全校でお別れ会を開いてくれました。このような会を開いてくれた中で私が感じたことは、１週間授業や実習全体を通して、子ども達のためにしたことが子ども達自身から返ってくるという、教職の魅力をこのような会の中で感じることが出来ました。私達もなかなか時間のない中だったんですが、子ども達にプレゼントをして、子ども達もとても嬉しそうな表情を浮かべてくれたことから、私も本当に教師というのはとても素敵な職業だなというふうに感じることが出来ました。

宿舎について簡単に説明したいと思います。１番辛かった点は食事の面です。食事が付いていなく、そして自炊も出来ないということで、ご飯のパックであったりとかレトルト食品等で１週間を乗り切ったので、なかなかその点だ

けがとても辛かったなという印象ですが、他にはお風呂や部屋等、とてもいい場所でした。

私自身なんですが、個人的に言うと、２年生の時にもへき地実習をさせて頂いてその時出会った子ども達にたまたま宿舎で、チャレンジスクールというものがあってその時に持っていた子達に出会って、あ、先生、というふうに言ってもらえたことがとても嬉しかったです。

最後になりましたが、このような会を通してへき地校というのは、自己有用感を育てるための教育というのが凄くされているなというふうに思いまして、私は今４年生なので、春から教職について働かせて頂く立場として、本当に自分自身の自己の課題というものも見えてきました。ここで学んだことを生かして自分自身もこのような教職に就いて、教職の能力を磨いていきたいなというふうに思いました。ご清聴ありがとうございました。

学生発表司会：阿部

それでは６番目の発表になりますが、釧路校３年生の勝谷諒太さんと井嶋俊貴さんの共同報告ですが、冒頭も申し上げましたように２週間実習の報告ということになります。

〔報告者〕勝谷　諒太・井嶋　俊貴　釧路校３年次
実習校：鶴居村立下幌呂小学校

ただ今ご紹介に預りました、釧路校の勝谷と井嶋です。時間が押しているということなので、出来るだけ簡単に発表の方をしたいと思います。最後で皆さん疲れてくる頃だと思いますが、10分間だけお付き合いをお願い致します。

私達は鶴居村にあります下幌呂小学校で、11月10日から11月22日まで、2週間の実習を行いました。夏に主免実習を終えた後の実習だったので、主免実習の経験も生かしながら、後はそこで出た課題をなんとか解決出来ればなという思いで、実習に臨みました。

実習校について簡単に説明したいと思います。まずは北海道の何処にあるかってことですね。赤が釧路市ですね。黄色で塗ったところが鶴居村になります。釧路市の隣に位置しているところです。これ釧路市内の様子なんですけども、大体釧路の教育大学があるのがこの辺ですね。下幌呂というのがここにあたります。これは鶴居村の鶴と後は、湿原展望台から見える湿原の様子になっています。下幌呂はここですね。道道53号っていう結構大きな道路に面していて、釧路市街からは大体車で50分ぐらい、１時間かからないぐらいです。

実習校についてです。これが校舎の様子になっています。平屋建ての造りになっていて、ちょっと古い学校だったので結構寒くて、実習中もそこがキツイところだったので、寒さとの戦いでした。児童数はこのようになっております。

教壇実習について簡単に説明したいと思います。私、勝谷は１年生単式学級に入らせて頂いて、全部で子どもが６人いました。６人なんですけど、１名ちょっと個別の支援を必要とする子がいたので、実際は複式のような形で、授業も全体に対する支援と、個別に対する支援をどっちも用意してやる形を取りました。全部で18時間させて頂きました。通常２週間実習ですと大体10時間ぐらいが平均的な時数なんですけど、下幌呂小学校さん凄く熱心な学校だったので、授業を沢山させて頂くことが出来ました。

私、井嶋は３・４年生の複式学級に配属させて頂きました。３年生が２名、４年生が８名。その内２名が通級指導の児童になっております。授業時数は全21時間やらせて頂きました。研究授業は算数で、３年生は円の中心を見つけよう、４年生は三角定規を２枚使って平行と垂直の作図から四角形を作るという、応用の作図の授業をやらせて頂きました。私はこの授業実践の他にも児童と一緒に地域の方々のお家を回る廃品回収という校外的な活動を行ったり、近くの幌呂小学校という所で２校交流学習にも参加させて頂く等、校外的な活動にも参加させて頂き、視野が広がる貴重な体験をさせて頂きました。

続いて子ども達の触れ合いについて簡単に説明したいと思います。子ども達はドッチビーという競技で遊ぶのが凄く流行っていて、ドッチビーっていうのはドッジボールのようなルールでやるんですけど、柔かいフリスビーみたいなものを投げて遊ぶ競技なんです。これは今道東を中心にちょっと流行ってきてるようなので、多分これから全国的

【勝谷涼太】

【井嶋俊貴】

に広がるんじゃないかなと思います。後はチームジャンプ大会といって、鶴居村がやってる長縄跳びの大会がありまして、それに向けて皆で練習していました。後は学級にいる遊び係さんっていうのが企画してくれて、皆でイス取りゲーム等もしました。私達２人とも、小中高とサッカーをずっとやっていたので、その経験を生かして子ども達皆で何か２人で出来ないかなと２人で考えた結果、全校児童と先生方を巻き込んで一緒にサッカーをしました。チーム編成は女の子と私達２人と、男の子全員という形でやって、２回やってとても盛り上がりました。

放課後の子ども達の様子です。これは「下幌呂母と子の家」という施設で、学校のすぐ隣にある施設になっています。子ども達が学校帰りに勉強したり、遊んだりする場所になっています。これは下幌呂コミュニティーセンターで、これも学校の隣にある施設になっています。子ども達が集まって、この時は百人一首の練習をしている場所になっていました。地域の方が集まって会合に使ったりする場所でもあります。

下幌呂での生活について簡単に説明します。下幌呂では宿舎として中尾牧場といって、牧場を経営している中尾さんにお世話になりました。自宅とは別にある離れを借りて、そこで２週間生活をしました。左下の写真を見て頂くと分かるんですけど、学校へは歩いて５分くらいの所なので、毎朝歩いて登校していました。これがその宿舎の中の様子ですね。ちょっと男２人だったので辛い部分も沢山あったんですけど、頑張って自炊もして２週間乗り切りました。これが下幌呂の２週間の実習だったので、間の土日で温泉に入りに行ったりですとか。後は鶴居村ふるさと情報館といって、地域の施設があったのでそこに行ったりですとか。後は、鶴見台で丹頂鶴を見に行ったりとか、そういうことをしました。中尾さんご夫婦との触れ合いということで、本当に良くしてくれて一緒にご飯を食べたり、お酒を酌み交わしたりですとか。後は研究授業の日にはわざわざ仕事の合間をぬって参観にも来てくれたりもして、本当にお世話になりました。

これが最後の日の様子です。実際に子ども達がお別れ会を開いてくれて、僕達のことを送り出してくれました。最終日にはお世話になった中尾さんにも僕ら２人でこういったお手紙を書いて渡して、最後終わりました。２週間という短い期間ではありましたが、下幌呂小学校の教職員の方々、子ども達、住まいを提供して下さった中尾さんを初め、地域の方々、後は実習の場を作って頂いた大学の教職員の方々等、本当に多くの人に支えられて人の温かさっていうのを感じることが出来た実習だなと思いました。今回の２週間での実習の経験を糧にして、私達には教採が控えておりますので、教員採用試験に向けて精進していきたいと思います。以上で発表の方を終わります。

学生発表司会：阿部

ありがとうございます。進行を考えてくれて大変ありがとうございます。２週間分なんですよね、もし付け加えるならば。

井嶋

そうですね、詳しいことはこの報告レポートの方にも書いてあるので、そちらを読んで頂ければ多分、１番簡単なのではないかと。

学生発表司会：阿部

協力的に早くやって頂いたので、休み時間の間で是非読まれて頂けたらと思います。では総合司会の方に戻したいと思います。

総合司会：廣田

もっと学生さんの話聞いてみたいんですけれども、時間がおしております。で、20分の休憩予定ですが15分にしまして、３時10分に再開をしたいと思います。質問ございましたら、私の方にお渡し下さい。学生さん達の間でも何か聞きたいことがあれば書いて、渡しても結構です。

パネルディスカッションⅠ

総合司会：廣田

それでは時間になりましたので、第Ⅰ部のパネルディスカッションを始めたいと思います。司会を西村先生によろしくお願い致します。

討論Ⅰ司会：西村

釧路校の西村です。どうぞよろしくお願い致します。パネルディスカッションⅠの進行をさせて頂きます。初めにコメンテーターの方からそれぞれお話を頂きたいと思います。その後に皆さんから、学生の発表についてもう少し聞きたいとか、言うことが沢山あると思いますので、そちらの方に時間を当てたいと思っております。終了予定時間、16時30分を予定しております。大変時間が限られておりますので、内容の濃い話が出来ればと思っておりますので、皆様ご協力の程よろしくお願いします。

コメンテーターの方の２名の先生を紹介させて頂きます。始めに、北海道立教育研究所研究主幹、渡邉直樹様です。浜中町立茶内第一小学校長、岡嶋治校長先生です。

〔コメンテーター〕

渡邉　直樹氏　北海道立教育研究所　研究主幹

道立教育研究所企画研修部で研究主幹をさせて頂いております、渡邉と申します。今回このような貴重な機会を頂きましたので、急ぎ足になるかもしれませんが、お話させて頂きたいと思います。

今回発表頂きました８名の方々は、お聞きするところによりますと、この実習に参加する時点で既にもう選抜されたメンバーでの実習だったということで、何物にも変えがたい、貴重な体験を出来たのではないかと思います。大変

苦労が多かったと思いますけども、是非これを120％ご自身のこの後の研究、それからの教職生活に生かして頂ければと思います。そのために若干でも役立つお話が出来ればというふうに思っています。

まず感想に入る前にですね、若干だけ説明させて頂きたいと思います。今日お手元の方に、企画研修部渡邉直樹ということで簡単な資料を付けさせて頂きました。この資料に表がありますけれども、この部分をまずお互いに共通理解した上で、北海道のへき地・複式教育というものがどうあるべきかを考えられればいいなと思い用意を致しました。まず上の方の表ですが、北海道には14の管内があります。いずれも他の県並の広さがあります。最も大きな十勝管内では、岐阜県と同じだけの広さがあり、最も小さな檜山管内でも佐賀県を上回る広さがあります。宗谷管内では、教育局の所在している稚内市から最も離れた小学校が、166キロ離れた所にあり、これは東海道新幹線の東京から静岡に近い距離となっております。北海道の学校教育を考える際に、この北海道の広域性抜きに考えることは出来ません。14管内いずれもへき地指定を受ける学校、それから複式学級を有する学校がございます。小・中学校の４割はへき地の指定校であり、全体の２割以上が複式学級を有する学校になっております。特にそちらの表をご覧頂いてお分かりのように、檜山管内、根室管内については、全ての小・中学校がへき地指定を受けており、檜山、根室では、管内教育がイコールへき地教育と考えていかなければなりません。この数字から北海道においては、へき地・複式教育とは特別な状況ではなく、ごく一般的な学校教育の形態と言えると思います。そのような意味からも、今回の８名の方々の体験も特別なものではなく、北海道で教職を担っていく中では、ごく一般的なものだという認識が大切だと思います。私が勤めております道研におきましても、現在へき地・複式教育に特化した研修講座は行っておりません。過去にはへき地・複式の研究室があった時代もありましたが、多分、先程もお話したような、へき地・複式が特殊なものではなく、北海道全体に関わる内容であるという押さえもあるためだろうと考えています。

複式学級の指導技術については私自身は経験がありませんが、何度か拝見したことがあります。正に職人技のようなところがあると思います。実は北海道教育推進計画というのは、平成25年からスタートしておりますが、その中で、へき地・複式に関わっての内容がここに書いてあり、①から⑤の中身になっています。ご覧頂いて分かるように④と⑤については、これは教員を配置する段階の話で、直接先生方の指導内容に関わるところではありません。①②③についても中を見ると、一般的なことが書かれています。特にへき地・複式に特化したような施策は、現在の北海道教育推進計画の中に位置付けられていません。それは裏を返せば、先程申し上げたようにへき地・複式教育は特別なことではなく、北海道全体にかかわる内容だということです。そのためこの程度の記載に留まっているものと考えられます。

【渡邉直樹氏】

今回、複式の学級が多かったということで、体験された方々もわたりですとか、ずらしといったような、複式独特の指導方法の部分に大変着目して体験をされたと思いますが、複式の技を身に付けることも大事ですが、まずその前に複式でない指導の技術をしっかりと身に付ける、基本的な指導過程の進め方を身に付けて頂きたいと思います。それは子ども達に確実に指導内容を身に付けるための授業を行う指導力であり、それがまず身に付いて、そして複式という職人の技が身に付いていくのだろうと思います。大学の関係の方々もいらっしゃると思いますが、特に大学の方々にお願いしたいのは、先程のようなごく一般的な指導案を一通り作れるだけの力を学生さん方に身に付けさせて、卒業させて頂きたいというのがお願いでございます。何故このようなお話をするかといいますと、５年目、10年目経験の先生方の研修に携ることが多くありますけれども、指導案を１枚書く毎に大変苦労されている先生方が、沢山いらっしゃるという状況が現状としてあります。この方々は５年、10年何をしてきたのかなという、？マークが付くこともあるんですけれども、是非ですね、学生さん方が現場に行って即戦力となれるように指導案を作る力を身に付けさせて頂きたいと思います。

学校内の教育活動については、教員の視点で言えば、沢山の業務を１人でやらなければいけないというところもあると思いますけど、子どもの視点でいけば多分、大規模な学校とさほど変らないんだろうと、むしろ、変わってちゃいけないんだろうなと思います。全国的に一定の教育水準を確保するという観点から言えば、日本国中どこにいても同じ教育を受けられるということが大事ですので、あそこに行ったらちょっと違うよというのでは、ちょっとまずいんだろうと思います。むしろ違いは学校の外側に多くあるのかなと思いますし、今回発表頂いた中にも、生活することの大変さを訴えていたレポートもあったと思います。お店がないですとか、書店がない町が沢山あるんですとか、塾のない町が沢山あるんですとか、そういったような違いが教育に関わります。それから生活する上で大変な思いをする事情もあるのだろうと思います。

皆さんのご発表で気付いたところを、何点かお話させて頂きます。まず１つ目です。大変瑣末なことですが、児童と生徒の違いを使い分けて頂ければと思います。発表の中に生徒という表現が出てきたり、児童が出てきたり、子どもが出てきたりしますので、もう一度整理をして下さい。もう１つ、些末なことで申し訳ないです。学級編制の「せい」の字は成果の成ではなくて、制度の方の制ですので。お１人以外は皆さん、成果の方の成で書かれてましたので、もう一度精査してみて下さい。これはもう、そういう用語だと思って覚えて下さい。

それから２つ目ですけれども、学校教育というのは、意図的な指導の積み重ねであり、自然と現在の状況になってきたのではないと思うんです。例えば、子ども達だけで主体的な学習を進めることが出来るですとか、分担して協力して作業を行うことが出来る、自然といい関係が出来る、少人数で小さい頃からの人間関係が出来ており、非常に仲がいいと。上級生が下級生の面倒を自然と見れる。これは自然となったことではなくて、これまでの指導の積み重ねの結果、そういう姿が表れたんだと再度認識して頂きたいと思います。それから複式ではない学級では、この場面はどんな指導になるのかなということを絶えず振り返りながら授業を構成するきっかけになったのではないかと思います。複式の場合、複式でない学級の場合、両者の比較をすることによって、授業の本質、目標を実現するためには、といった視点や、子どもに身に付けさせる力を明確化する、といった視点で授業はどうあるべきかということが見えてくると思います。

教師に必要なものが３つあると、私は、先輩教師から教わったことがあります。１つは人間性、それから１つは専門性､そして情熱｡この３つのいずれも欠けてはいけない。でもどれか１つだけを取るとしたらどれを取りますか？と問われた時に、どれか１つであれば情熱だと教わりました。情熱さえあれば他の２つは補うことが出来るという意味でお話されてたんですけれども、専門性も人間性も絶対大事です。でも情熱があればそれをこれからの研究、それから研鑽の中で専門性や人間性を徐々に高めていくことが出来るかなと思います。今回の体験を通して皆さんは、その情熱という部分に火は付けられただろうと思っています。その火を更に大きなものに燃やし続けていくと共に、必要な専門性を身に付けて、人間性を磨いていって欲しいと思います。

２年生とそれから３、４年生の発表がありました。２年生の方は教職への情熱というところが大きく取り上げられていたと思います。３、４年生は今後解決すべき課題の明確化ということで、発表は大分違う内容だったと思います。さすが３、４年生だと感心致しました。そして是非、絶対ですね、教員採用試験に合格するぞという決意を持って頂く機会となれば、この実習の目標は達成出来たのではないかと思います。是非これから一層研究を進め、北海道の将来を担う子ども達を育成出来る教師になって頂ければと思います。少し言葉たらずだったかと思いますけれども、感想も含めて以上で終わらせて頂きます。ありがとうございました。

討論Ⅰ司会：西村

続きまして、岡嶋校長先生お願い致します。

〔コメンテーター〕

岡嶋　　治　氏　浜中町立茶内第一小学校　校長

茶内第一小学校の岡嶋です。今の学校には３年目になりました。実習の受け入れも３年目ということで、今までのことも含めまして、そして、今日の発表をお聞きした感想も含めまして、私の方でちょっと話をさせて頂きます。

まずは､発表ご苦労様でした｡大変素晴らしい情熱を持った話、そして、報告の中でも色んな貴重な経験が出来たんではないかなと思います。このようなへき地実習があるということは、皆さんにとって本当に恵まれていると思います。大学の方のこういうシステムというのは、素晴らしいことだなあと思っております。この実習で多くのことを学んだことがもう既に、他の学生さんより一歩リードしております。教職に就いた時にこの経験が凄く生かされるのではないかなと思います。

ちなみに、私は今から36年前に釧路の教育大にお世話になりました。今回このようなことで引き受けさせて頂きましたけども、実はその当時は実習と言えば本当に主免の実習しかなくて、こういうへき地の実習なんてまず考えられてなかったのではないかと思います。ただ、私自身は今の釧路市動物園がある近くの小さな学校の小中併置校で、小学校の時、複々式という、今は多分ないと思うのですけども、３年生、４年生、５年生一緒の教室で、当時の先生は素晴らしいなと思います。ということは３分の１しか先生と接触していないんです。後の３分の２は自分でこうやって一生懸命課題に取り組んでいるということが結構あったので、そういうふうな経験を小さい時に知ってたのですけども、それでもやっぱり先程言った、つまずく機会もなく一生懸命やってたなと昔のことを思い出しております。そのようなことを含めると今の学生さんは色んなことが経験

【岡嶋治氏】

出来て、そしてそれを尚且つ生かせるということでは、大変貴重かなと思います。

感想は後ほどということで、先にせっかくレポートを作ったので、このことを先に喋らせて頂いて、そこの中で学生さんの報告が若干入っていればいいかなと思います。時間が限られていますので、表紙の方は『今の学校は純酪農地帯です。』ということだけをお話致します。18名の子ども達がそこで生活をしております。渡邉先生が話したように、子ども達は素直です。これは私が来る前からもうすでに、地域とそれからそこにいた当時の校長先生を含めて、先生方、そして保護者はもちろん、三者が一体となって育てていった教育の繋がりで、今の現在の私がここで学校経営をしているということを、学生さんもこれから学校に勤めた時にはそういうふうな思いで勤めて頂ければなと思います。学校ですので先程言ったように、どこの学校でもきちんとしたものをやらなければならないということで、校長は経営の方針を持って、そこで取り組むと。基本は大きい学校も小さい学校も変らない。ただ規模が小さい、そして複式の学級編制とか色んな条件をどうその学校、つまり子ども達にどういうふうに育てたいのかということの特色、特徴を最大限に、それは校長だけで決めることではなくて、教頭、一般の先生方、そしてもちろん保護者の方々もこういうふうなことになって欲しいんだということを吸い取りながら、学校経営をしていくということが大事なことになってきます。そういうようなことで経営方針を決めながら、うちの学校の中での特色が、３ページに書いてあります。それについては、書いてある通りなので、ちょっと省きます。小規模校の良さとそれから若干こういう所が困るなという部分も中にはありますけども、でも不利な部分を逆手にとって良さとして考えていかなければ、この学校経営ということについては成り立たなくなるので、そういう部分で３ページの下の方に長所として、一応５点を上げておりますけども、新しい教育活動を取り組む時にも校長以下、色んな人達の中で、これやろう、これが子ども達のためになるんだったら、じゃあ皆で一緒にやろうというふうにすぐに。大規模校ではなかなか皆でっていうのはなかなか難しいんですけども、小さいからこそそういう小回りが効いて出来る。じゃあそれをやることによって子ども達がぐんぐん伸びれば、素晴らしい学校経営だなとなるということで、１つ取り上げています。その他に家族的な雰囲気で取り組めるということで研修の部分もお互い協力し合えるという、大変小さい学校ならではの取り組みがあります。そして先程から何回も言ってますけども、地域、保護者の協力も凄く得られやすいです。それも多分学生さんが実感していると思います。本当に地域の方々が温かく協力してくれるという部分です。うちの学校でもそういう部分で本当に協力的にして頂けるということになります。

そこで学生さんに望むことということで、感想もあるんですけど、本校にも女性２名の学生さんがみえたんですけども、校長講話では、私は実習で５つのお願いっていうことで、実習生にはいつも同じことをお願いしています。１つ目は、うちの学校は２週間の実習ですので、主免を終えた中での実習の目的をきちんと持つことです。次に、せっかく複式の学校に来てるのに複式の授業をやっぱりきちんと見たり、それから実際やってみて難しさ、こういうところのものをきちんと理解して学んで欲しいということです。それから３つ目は、これは基本です。教師、社会人としての自覚で生活して欲しいと。たまたま学校の横に住んでますけど、遅刻とかそういうものも含めて社会人ですので、例えば挨拶だとかをきちんとして欲しいというお願いをしました。４つ目は、子ども達と楽しい思い出にすることです。これは多分学生さんそれぞれ思い出が出来たと思います。別れが大変辛いよ、ということはそれだけ中身の濃い経験が出来たのではないかなというふうに思います。そして５番目は、指導教官と色んな話の中で、こういうことをこうだよというふうに教えてもらうことです。また、他の先生方からも学んで欲しいということです。勿論、保護者と話せる人は保護者とか、更に増やしていけばいいんですけども、基本的には指導教官と他の先生方から学んで欲しいということ、こういうことを５つお願いしました。

写真の４ページには２人の学生さんが一生懸命やっていました。実は、車が無いものですから、２週間びっしり住宅にいなければなりませんでした。距離的にはコンビニがあるところが５キロくらい。ちょっと行ったところでは20分ぐらいで厚岸、更に１時間あれば釧路市まで行けるのですけども、車が無いものですから食糧も大変だということで、１週間分で丁度中間、たまたま中学校の文化祭があったので、「文化祭見に行くかい？」と言ったら、「行きます。」ということで、じゃあ文化祭見せて、その後帰りにちょっと厚岸まで寄って、「お買い物ある人？」て言って、お買い物して帰ってきました。車の中でも色々話が出来て、私も喋りますけども学生さんの方もそういう部分で、実習でなかなか話をする機会がなかったので、車の中での話がとっても良かったかなというふうに思っております。ただ今回やっぱり車が無いということも含めて私も時間取れなかったんで、せっかく学校にはいたんですけど、学校だけだったんですよね、結局。そこでのお父さんとかお母さん、どんなことをやってるのって、ちょっとでも触れさせてあげれば良かったなと後から思いました。例えばうちでいうと、酪農地帯ですので凄い広がりとか、鶴居もそうですよね、酪農地帯ですので。利尻だったら海ですから、そういうような所とか、そういうふうな思いを更にさせてあげると、きっと教員を目指す時に、大変だけど是非頑張りたいというふうになってくれるんではないかなと思います。

５ページに、大学に期待するって書いてますけども、釧路の教育大の場合は、本校に新入生研修ということで、１年目の学生さんが半日か１日ちょっと来て頂いて、その後主免されるそうです。本校、新入生研修には参加出来なかったのですけど、その新入生研修も丁度運動会がこの後にあ

りまして、その運動会でお手伝いをということで、実はこの実習に参加している２名の学生さんも運動会に協力してくれたということで、すぐ２週間の１日目よりも運動会で顔合わせてますので、ちょっと仲良くなってすぐに打ち解けれるという部分では、なんかこうもっと積極的に来れる機会を持って頂くと、大学も受け入れとしても大変メリット的にはあるんではないかなというふうに思います。

最後に、北海道のへき地・複式教育研究連盟っていう組織があり、来年度から第９次ということですから、凄い歴史のある研究をずーっと先輩の先生方が続けている研究団体があります。その組織の一部として私も関わらせて頂いてるんですけども、是非、へき地の学校の先生方が力を合わせて研究をしているというものがありますので、学生さんも是非機会があったら、参加して頂きたいと思います。ちなみに、来年度十勝大会です。糠内小学校さんがその授業会場校の一つになります。私はそこで研究協力者として、今年もプレ大会に参加させて頂きながら、来年、本大会を迎えます。そこの学校は福島千里のオリンピック選手の母校ということで、100メートル廊下があります。記念として町教委で作られたそうです。そういうふうに地域ならではということでは、観光という部分でやっているということで、一応ちょっと別で紹介致しました。色んなことの中で、今まで学生さんがこれから頑張って教職の道に是非進んで欲しいなと思います。先程言いましたように、へき地に１年目から行く方もいれば、最初に大きい規模の学校に行っても構いません。是非、最終的には大きい学校、小さい学校、色んなことを経験しながら勉強させて頂いている私ですが、ずーっと大きな規模じゃなくて、大きい、小さい、中ぐらい、色んな所を経験して、一回りも二回りも大きな先生になって頂ければなというふうに思います。少し話が伸びたかもしれませんけども、今回このような機会を頂きました、教育大学のへき地教育研究支援部門の皆さんに感謝申し上げ、私の方の感想は終わります。

討論Ⅰ司会：西村

２名の先生、どうもありがとうございました。それではこの後の６組の学生の発表についての感想ですとか、意見、そちらの方に時間を充てたいと思います。質問等の際には大変申し訳ありませんが、所属、お名前を言って頂けるとこちらの方でも大変助かりますので、ご協力の程お願い致します。

それで先程６組の学生の発表あって、何来るか緊張してるしょ？ね。大きく６個あると思います。１つ目が子どもとの触れ合いの部分、２つ目が教科指導の部分、３つ目が地域との関わり、４つ目が職員間の人間関係、５つ目が教育実習の生活、６点目が皆さんが最後に語って頂いた教職への思い、これ辺りが大きく６点ぐらいあるかなと思うんですが、この６点にこだわらず皆様方から色々な質問とか、意見を頂ければと思っております。

どんどん手を挙げて発表して頂けると、大変助かります。口火を切るのは難しいと思いますが、どなたか、お願い出来ないでしょうか。よろしくお願い致します。

北林靖市郎（北海道立教育研究所　企画・研修部　部長）

道立教育研究所の北林と申します。皆さんの発表、本当に新鮮な感性で子ども達の姿を捉えていました。それから、授業の難しさを実感されていたことだとか、特に地域の方々が大変優しかった、そのことをどなたも言っておられました。そこで１つご質問なんですけども、何故地域の方々は皆さんに優しく接していたんでしょうか。そこを考えて下さい。ちょっと何名の方が考えて答えて頂ければ有り難いです。

討論Ⅰ司会：西村

全員だと時間ないので、１人飛ばしで。４名ということでよろしいでしょうか。お願いします。

井嶋

私が思うに、僕は中尾牧場さんで宿泊させて頂いたんですけども、一緒にご飯を食べさせて頂く中で、中尾さんもその学校の出身だということで、非常に学校に対して温かい、母校に対して愛情というものを持っている方でした。そしてそういう実習として、僕と勝谷君が行かせてもらったんですけども、その地域の子ども達を育てるという広い視点を持っておられたからこそ、私達に対してそのように優しく接して頂けたのではないかなと、私は感じています。

高橋　詩織

私は中士別小学校で実習させて頂いたんですれけども、私が実習をさせて頂いた中で、校内マラソン大会ですとか、実習が終わってから学芸会にお邪魔させて頂いたとき、そこでも保護者の方々や、地域の方々がおりました。私も最初保護者の方々が手伝って、椅子を運んで下さったりしてるのがいいのかなと思いました。最初は「私が持っていきます」と言ってたんですが、学校としてはそれが当たり前のようになっていて、私は学校が地域のコミュニティーセンターのような役割を果たしているんだなと凄

【高橋詩織】

く実感したのと同時に、実習の間に実習生通信というのを出させて頂いていたんですけれども、お母さん方がそれをご覧になって頂いていて、そういうのを通して本当に関心が凄くあって、温かい目で見て頂いていたんだなと実感して、そういう点から優しくしていたのかなと感じました。

鈴木

私は幕別町の糠内小学校に実習へ行かせて頂いたのですが、やはり地域の方々が学校に対して、子ども達に対して、愛情があるからこそだと思いますし、学校と地域の方々との信頼関係があって、地域の方々もその学校や子ども達への関心がやはり高いため、私達を快く受け入れてくれたのではと思いました。

加賀谷

私は名寄市立風連下多寄小学校に実習に行かせて頂いたんですが、神社祭の時にジンギスカンパーティーというのがあって、それに参加させて頂きました。その時に地域の方々に、自分なりの教育の話っていうのを沢山して頂いたんですね。その時、勿論冗談ではあるんですけれども、うちの地域には独身の男がたくさんいるんだ、是非出来れば嫁に来ないかというような話は沢山して頂いたんですよね。おそらく地域が学校を支えているっていうことはありますが、学校で育った子ども達が地域を支えていくんだっていうことも、地域の方々はきっと分かってらっしゃるんだなと思います。だからこそ自分達が学校を支えて、その学校で育った子ども達がまた地域を支えていくっていうのが分かっているからこそ、教育に強く関心があって、それで教育に携る私達に、強く頑張って欲しいという気持ちを込めて下さっているのかなというふうに感じました。

北林

ありがとうございました。どれも正解ですね。素晴らしい答えだと思います。やっぱり地域の子ども達は小さい所では地域の宝ですよね。その子ども達を教えてくれる先生だから優しくしてくれるということです。違う職業で、多分民間から行ったらこんなに優しくしてくれないと思います。それだけに何を思って恩返しをしたらいいのか、やっぱりそこは授業なんですね。各教科等の授業を通して、こういう力をしっかり子ども達に付けてあげる、地域から都会に出て行っても通用する力、地域から東南アジアへ出ても通用する力、授業を通してしっかり力を付けてあげる。そういう是非プロフェッショナルな先生になって頂ければと思います。ありがとうございました。

討論Ⅰ司会：西村

ありがとうございます。今授業の方のお話出ましたので、複式の授業作りの関係について少しお話を深めれればと思っております。授業作り関係で学生に聞いてみたい点とかありますか、いかがですか。お願い致します。

馬野　範雄（大阪教育大学　准教授）

大阪教育大学の馬野です。今日はご苦労様です。一つ授業作りについて、聞いてみたいと思います。２年次、３年次、４年次と複数の学年にまたがって行っているようですけど、それぞれ、２年次、３年次、４年次で、例えば授業づくりということで、どういう目的というか目標というか、自分なりの問題意識をもたれているのか、それをちょっと聞いてみたいと思います。よろしくお願いします。

討論Ⅰ司会：西村

ちょっと聞きますね。２年生、３年生、４年生、はい。それぞれ学年で聞いてみます。２年生、海藤さん、２年生の方でお願い致します。

海藤

申し訳ないんですけど、もう少し詳しくおっしゃって頂けたら。すいません。

馬野

２年生で行く１週間実習と、３年次・４年次で行くのとでは同じではないですね。その間に主免をとる実習も入っているだろうから、何かそこに自分なりに問題意識をもって行かれていると思います。どのような違いを自分なりに意識されているのか聞いてみたいと思います。

海藤

２年生として実習に行くのか、３年生として実習に行くのかっていうことですか？

討論Ⅰ司会：西村

２年生、３年生、４年生行くよね。３年生で主免実習あるよね。だから２年生での学びと３年の学びと４年の学びと、きっと違うだろう。そういう点で主免に行ってない２年生の学び、例えばどういうものがあるか。で、３年生だと２年生を１回経験して、主免を経験して行ってみてどうかとか。それぞれ話が変わってくると思うんですよ。

海藤

はい、ありがとうございます。私２年目で行って、授業を１週間あんなに何時間も見させて頂いたのも初めてだったんですけれども、実際に大学の合宿を通して授業作りというものは、１年に２度くらいさせて頂いていて、模擬授業も大学生を前にしてなんですけれども、やっていて、その中で実際に子どもを前にしての授業、先生がやられているのを見ていて思ったのは、やっぱり大学生を前にしての授業と、子どもを前にしての授業は違うと言いますか、やっぱり子どもだから反応は様々なんですよ。予想外のこともあるし、色々あると思うんです。実際に自分が授業作りにあたっては、偏った見方しか出来ていなくて、自分目線、教師目線でしか考えられないんですけれども、実際に

【海藤彩香】

授業を見て、「あ、子どもはこういう反応もするんだ。」というのも何時間も見させて頂いたことによって、色々な視点で授業を考える、子どもの視点で。子どもと言っても１人の子どもの視点ではなくて、色々な子どもがいるので、何通りもの反応を考えて授業を作らなければいけないんだなということが分かったのと、私今２年目なので来年は教育実習があるので、その時にはそのことに気を付けて授業を作っていけたら、より良い授業が出来るのではないかなと思いました。

討論Ⅰ司会：西村

ありがとうございます。次３年生、勝谷君、お願いします。

勝谷

僕は３年生で、今年実習に行ったんですけども、主免実習に行く前まではやっぱり、授業作りとか実践的な部分はどうしても場が無かったので、イメージがあまり湧かないまま主免実習に入ったのが正直なところです。へき地実習は主免実習を終えて、自分なりに課題と成果がはっきりしていたので、成果の部分を生かしてへき地の授業でも出来ることはないかなってことを考えたりとか、後は主免実習で明らかになった課題をどうやって修正していくかってことをへき地実習ではやろうと思って、今回実習に参加しました。

討論Ⅰ司会：西村

４年生、お願いします。

高橋

私は２年生の時に、初めてへき地実習に参加させて頂きまして、その時にもう単式で授業をさせて頂いたのですが、その時は本当に授業を１時間で流すことで一杯一杯で、子ども達の反応とか、色々なことに気が回らなくて、自分がやっていることだけに一生懸命でした。それを経験して３年生の主免実習に行かせて頂いて、１週間という２年生の経験から、１ヶ月という長いスパンの中で子ども達との関係も出来上がってきて、授業も続けて何時間もやらせて頂く中で、前時でのことを受けて子ども達の関係性の中から授業をするっていうことで、何となく自分の中でもやりやすさというものを感じて、主免実習を終えることが出来ました。そして４年生になりへき地実習にもう一度行くことができました。新しく子ども達と出会ってそこで授業をやった時に、子ども達とのまだ出来ていない関係性の中で板書とか、活動の指示とか、自分の話していること、やっていることが改めて新しい課題としてどんどん見えてきたなという印象を受け、４年生のへき地実習を終えました。

馬野

ありがとうございます。聞きたい事を見事に聞かせて頂けたので良かったと思います。

討論Ⅰ司会：西村

教科指導等にかかわりまして。お願い致します。

平岡　賢治（長崎大学　教授）

長崎大学の平岡と申します。今日はありがとうございました。今までのお話を聞かせていただいていると、優等生の解答になっているのではないかと思うんです。何か１つの視点が足りないのではないかと感じています。子ども達、先生方、授業に関しても、皆さん大変いい経験をされていると思います。しかし、２年生よりも３年生、３年生よりも４年生、授業で扱う教材をどのようにそれぞれの学年として咀嚼して子ども達に返していくか。先程のどなたかの話の中に、既習の内容ということがあったと思うんですけど、教材は生きているんですね。繋がっているという見方をどこかでして欲しいなと思います。実際、教師になったらそればっかりで追われてしまう。その観点でやっぱり２年生、３年生、４年生それぞれの実習でどのように感じたか、というのを少しお話ししてもらえればと思います。

討論Ⅰ司会：西村

教材分も含めて、教える内容をどう教えるかっていう部分をお話ししたかったってことですね。その他に今ですと内容とか授業の準備だったんですが、加賀谷さんの資料の中に、学習の準備に関して「へき地だからこそ」っていう文章があるんですね。「へき地だからこそ」なんかこういう学習の準備が大切だ、必要だっていうの何かありますか？加賀谷さんいかがでしょうか。加賀谷さんの発表の中にあったんで、是非お願い致します。

加賀谷

さっきのスライドのところで戻っていたのは、授業の準備で黒板の授業をどのようにスムーズに上手く、わたりとずらしを行えるかっていう点で戻っていたんですけども、複式の授業でどなたかの発表に、いかにわたりを上手く行

えるかっていうのが勝負だっておっしゃっていました。やっぱり複式の授業の中では、わたりとずらしをいかにスムーズに出来るかっていうのがポイントなのかなというふうに感じました。その点でさっきのスライドと同じことになってしまうんですが、模造紙にあらかじめ書いておいて、その板書の作業を減らすことであったりとか、実際に板書はしていても、休み時間の間にあらかじめ先生が黒板に書いていたりとか、間接授業を理解するのに理科の授業で学校にハウスがあって、色んな野菜の花だったり、野菜だけじゃなくて色んな普通の花とかもあるんですけども、自分達で花粉を取りに行ってみようっていう作業を入れたりとかしていて。そういうことが出来るのもハウスがあって、そういう理科っていう授業が出来る環境があるからこそ、そういう間接っていうか、合間の時間を児童にやらせるってことが出来るかなと思います。下多寄小学校には田んぼもあって、その田んぼの管理をずっと教頭先生がしていらっしゃるんですね。その学校に田んぼがあるせいで教頭先生は、ほとんど毎日自分の家から遠くに旅行とか全然出られない、というふうに嘆いていらっしゃいました。ずっと見ていなきゃいけないんだっておっしゃってました。そういう色んな周りの畑だったり田んぼだったりっていう環境を教頭先生が見ていらっしゃるっていう、裏の管理の部分でも凄く大きい複式、複式だから、準備だったり管理っていうのが大きく影響しているのかなっていうふうにも感じました。

討論Ⅰ司会：西村

指導等に関してご質問等があったらお願い致します。

鉄矢　悦朗（東京学芸大学　准教授）

今日はありがとうございました。学芸大学の鉄矢と申します。大変頼もしい学生さん達の汗と涙の体験実習を聞かせて頂いて、色々なことを考え工夫していることを具体的にイメージできて良かったです。私も「へき地だからこそ」って大切だと思っていました。「へき地だからこそ」教員はこうしなきゃいけない、「へき地だからこそ」教え方はこうでなくてはいけないって思いがあるようですけれども、「へき地育ちの子どもだからこそ」全国に出る時こうあって欲しい、世界に出る時こうあって欲しいとかっていうイメージってありますか。子どもの目線で、子どもの立場になって考えている姿勢を大切にしているところも聞きたいので。先程から教え方、自分がちゃんとしたいと思っていることは伝わってきているのですが、本当は子どもをどうしたいのかっていう皆さんの考えが聞きたいと思ったので。

討論Ⅰ司会：西村

どういう子どもを育てたいのっていうことですよね。ということは、どう授業をしたらいいの、授業でどう力を付けるってことに繋がると思うんですが。

中妻　雅彦（愛知教育大学　教授）

愛知教育大学の中妻と言います。今日はどうもありがとうございました。８人の方の発表を聞いて、実習を共同生活、合宿でするところが、学生さんの育ちのポイントなのかなと思ってずっと聞いていました。愛教大ではこういう実習形態はないんです。うちの大学は、講座によっては研究室ぐるみで合宿に行くというのはあるけれども、そこで共同生活することはありません。共同生活をしながら実習を経験したことによって、皆さんがどういうような教職員間の関係性を作っていったらいいのかを実習校の先生方じゃなくて、あなた方の共同生活の中で学んだことはないのかなとずっと考えていました。どんなことを学んだのかをちょっと教えてもらいたいと思います。

討論Ⅰ司会：西村

五十嵐さんお願いします。

五十嵐

私は南富良野町立の落合小学校というところで実習をさせて頂いて、南富良野の落合小学校から少し離れた幾寅というところにある住宅をお借りして、付近の小学校に実習に行っていた他の方々と一緒に共同生活を送らせて頂いていて、私自身は釧路校の学年も違う方々らっしゃったんですよね。私の部屋には、私と同じ学校から同じ学校に実習に行った山本さんという人と、釧路校の３年生の先輩が主免の本実習でいらっしゃって、その３年生の先輩は、旭川から南富良野付近の小学校に実習に来る学生が入れ替わり立ち代りで出て行ってて、なんか凄い一期一会なんだよねっていうふうには話していました。私がその方と他に、同じ学年の私と同じ学校に実習に行った相方と一緒に共同生活を送る中でやっぱり学んだというか、いい経験になったなっていうのは、まだまだ未熟な身ですから１人ぼっちで教員生活の中で、子ども達のために授業を作ったりだとか、１日の振り返りをしたりとかするよりも、２人で一緒に今日こんなことがあったねとか、あの時のあの子の理解した時の表情凄い可愛かったねとか、そういう他愛無い話や、今日の授業のあの時の先生のあれってどういうことだったのかなとか、そういう話をする機会が凄く多かったですし、後はやっぱり釧路校の先輩が同じ部屋にいらっしゃって、毎朝早くに準備していらっしゃったりとか、次の日の授業の準備をしていらっしゃるのを側で見ているだけでも凄く勉強になることが沢山あったので、１人の実習よりもその分学ぶ機会があったので、共同生活があったので良かったなと感じてます。

討論Ⅰ司会：西村

男性２人の共同生活はどうなるかということで、井嶋君お願いします。

井嶋

私が共同生活で一番実感したことなんですけど、今のお話とも若干被ってしまうと思うんですが、やはり学校生活であったことを一人で抱え込んだりせず、また、成果も１人で溜め込むというか、二人で共有し合うっていうことが大切なんじゃないかなっていうふうに思いました。実際僕はこのフォーラムを通じて、結構色々勉強になる意見を沢山他の方からも頂いているように、実際、今日こういう授業をしたんだよとか、どういう授業した？っていう会話を共同生活の中で行っていくことで、もしかしたら自分にも使えるようなヒントを得られるんじゃないかなっていう意識を持ちながら、私はこの実習に臨んでいました。

討論Ⅰ司会：西村

その他ご質問等ありましたら、お願い致します。

宮武　一典（へき地教育アドバイザー　旭川校）

アドバイザーをしております旭川校の宮武でございます。宿泊に関しての若干の補足説明をさせて頂きます。旭川校は21校43名が実習に入りました。その内容や宿泊形態は様々であります。今日旭川校から２人来ていますが、１人は空いた教員住宅を借用しました。もう一人は、町教育委員会で教員住宅を２戸用意していただき、１戸は男性用、もう１戸は女性用というところを無料で使用させていただき、風呂、炊事場、その他生活に必要な物はほぼ揃っている状態で迎えていただきました。この町には小中高校がありますが、町の活性化のために、教育実習ウェルカムという立場で多くの学生を積極的に受け入れています 。丁度９月は高校の実習生もいるし、中学校の実習生も入る。教育大学だけではなく他の大学も利用し、このへき地校実習の学生と様々な校種の学生が互いに共同生活をしながら、いろいろな体験が出来たと学生が感想を述べていました。へき地校実習の立場としては、それぞれの地域に応じて出来るだけ実習校の近くから実習に行くのが一番望ましい形ととらえて宿泊先を配慮していますけれども、それを貫き通すとどうしても宿泊場所の確保が難しい場合があります。教員住宅は空いていない、民宿にお世話になる、地域の会館を借りるなど。会館を借りることができても、部屋がカビ臭かったり、地域の葬式が入るときは一時退避を余儀なくされるところも中にはあります。また、ライダーハウスに泊まっている者もいます。時期的に８、９月はオートバイに乗った観光客が来ますので、その方々と共同生活をすることになります。10円玉を入れてガスを出して炊事をする、洗濯も一緒にその人達とするというような実態もあります。このように、いろいろな宿泊の形がありますけども、学生達はそれぞれの中で、見知らぬ人たちとの出会いとコミュニケーションを体験したり、あるいは学校の近くで、あるいは地域の方にお世話になって泊めて頂いたところでは、そういう地域との出会いやコミュニケーションを図りながら、学校以外でも貴重な体験を積んでいるのが実情だと思います。その意味では、これがいいとか、こうでなければならないというのではないといえます。へき地校実習に入る学校や地域の事情に応じていろいろな形態があるので、学生には、実習経費の掛かるところや、お金のほとんど掛からないような場合もでてきます。さらには、山村留学を実施して全国各地から来る子どもたちの寮に泊めてもらっているというようなところもあります。そこでは食事代はいらないということ言われたりもしていますけども 、きちんとお金払いなさいという指導もしています。いろいろな形はありますけれども学生の話を聞くと、宿泊料の多い少ないは問題ではなく、そういう体験が出来るということ、短期間ではあるが大学を離れて大学で生活をしているのとは違う、学校の近くで地域と学校に密着した生活をしていることに非常に意義があるのだということを言っていました。５日間で５千円で済む学生もいれば、５日間で４万５万払う学生もいますが、実習終了後はお金に代えられない貴重な体験ができたことを心から喜んでいるようです。

この実習に参加したすべての学生にはこのへき地校体験実習の体験を生かして、３年次の本免の実習に向けて今後の学生生活を過ごすモチベーションを高める機会にしたり、さらには、これらをベースにして教員採用を目指して頑張って欲しいと願っています。

討論Ⅰ司会：西村

次は実習中の生活等についてもお話頂きたいのですが、何か質問等ありますか。

それでは、小規模の中での生徒指導の方に話を変えていきたいと思います。子どもと距離が近くて凄く良かったと思うんですが、その辺り皆さんから学生に聞いてみたい点等ございますか。お願いします。

花井　慎吾（南富良野町立落合小学校　教諭）

南富良野町立落合小学校の花井と言います。よろしくお願いします。先程どのような子ども達をっていうようなお話がありました。そこでやっぱり子どもの見取りっていうのが大切であって、目の前の子ども達が一体どんな力が不足しているのか、どういうところが優れているのか、そこからどういうところを伸ばして、と考える必要があるのかなと思います。実習を通して先生方の目から、具体的な児童の名前は出さなくて結構ですので、こういう力はこの子あるかな、逆にこういうところが今後付けていく必要がある力なのかなっていうような、言葉悪いですけど、子どもの長点と欠点のようなものがもし見取りで１週間、２週間って短い時間なんですけれども、その中で分かったことがあれば、お知らせ願えればなと思います。

討論Ⅰ司会：西村

実習中に会った子どもの中で、個人名は出さないですよね勿論ね。出さないんですけども、こういう力が付いてい

る、または力を伸ばしたいということはありましたか。

幕別糠内の鈴木さんどうですか。子どもにこういう力が付いている、またはこういう力を付けさせたい。はい、お願いします。

鈴木

私が行った糠内小学校で１・２年生のクラスに配属させて頂いたのですが、１日目に担任の先生とお話をして、この学級にはこういうような子ども達がいるよ、というお話を伺ったのですが、やはり少人数なので先生方やっぱり一人ひとりの子ども達のことを良く分かっていて、その子どもの家庭と毎日連絡ノートだとかの親御さんとの交流がありました。しかも毎日連絡ノートを通して、家でこういうことがあったとか、学校で○○○○があったとかの交流をしているという話を聞きました。一人男の子がいたんですが、お姉さんが入院して、お母さんがお姉さんに付っきりになっているので、最近忘れ物とかそういうものが多くなってきているという子がいて、そういう子に対しての支援とかも考えたりする必要があるとか、家庭との連絡を取りながらその子どもの、例えば忘れ物だとか行動とかの意味とか、そういうふうな連絡ノート等を通して、先生方は子どもの理解をしているのかなと思いました。

討論Ⅰ司会：西村

へき地の少人数なんですが、子どもに身に付けさせる力はあるだろうと。それは少人数、大きな人数変りなくだろうと。その力は何だろうという不問的な話になりますと、コメンテーターで道立教育研究所の方もいらっしゃっておりますので、今子ども達に身に付けさせたい力、こんな力だよっていうことをちょっとお話頂ければと思います。よろしくお願い致します。

渡邉

基本的には、先程コメントさせて頂いた内容と同じように、へき地だから、へき地でないからという違いは全くないように思っています。だからこそ、特別と考える必要はないのではと思います。先程先生の方からもお話がありましたが、へき地の子ども達を世界へ羽ばたかせようとするのであれば、この子達がどういう子だから、世界に羽ばたいて行くために、どんな力を付けさせなければならないのかということを一人ひとり見ていく必要があると、私は思いながらお話を伺ってたんですね。ということは、どんな都市部の大規模の学校であっても、へき地の学校であっても、この子はこういう子で、この子がこのように活躍していくためには、こんな力を付けてあげる必要があるということを一人ひとり見極めていくことが必要なんだろうと思います。どこにいても個に応じた指導というんでしょうか、一人ひとりをしっかりと見て把握しなければいけない。その時は多い人数、少ない人数というのは、特性としてはあると思いますが、その違いは一人ひとりを把握したものの全体像が多いか少ないかという違いでしかないように私は思っています。

【鈴木千恵】

討論Ⅰ司会：西村

すいません、急に難しいことを振ってしまって。申し訳ありませんでした。

次に皆さんからのご質問､廣田先生､先程から手が挙がっていたと思うんですけど。お願い致します。

廣田

廣田でございます。先程、渡邉先生から出てたかもしれませんけども、へき地の子ども達はとっても学年を越えて仲が良いよねって話をしていましたよね。それは自然に出来るもんじゃないんだというふうに言われていたと思うのです。何か学校で実習をしている時に、子ども達の学年を越えた仲というのかな、これがどうやって作られるのだろうかということを観察したことがあったらちょっと教えてもらいことと、そうやって学年の中の繋がりが凄く滑らかであるということが多分、主免実習をまだ経験したが人少ないと思のですが、多分大都市部とはちょっと違う、いい教育効果を与えているんだと思うのですが、学校の生活だとかその時のものにどう影響を与えているのか、何か観察したことがあったら教えて頂きたいと思いました。

討論Ⅰ司会：西村

釧路校の高橋さん、いかがでしょう。お願いします。

高橋

私は幕別町立糠内小学校に実習に行ってきました。私は今まで小中高と大規模校出身だったので、へき地の実習に行って、休み時間に皆一斉に教室を飛び出して体育館に集まって、ドッジボールしようって言って、１年生から６年生まで全員で鬼ごっことかをするっていう現象が、本当に私はこんなの有り得るんだと思って。私が通っていた小学校では、学年を越えて遊ぶなんてことは有り得ませんでした。クラスの中でもクラス全員で遊ぶということも少なくて、どうして学年を越えて遊べるのかなと思って、ちょっ

と先生方に質問をしてみたんです。返ってきた返事が､「兄弟が多いということもあって、お兄さんお姉さんが妹、弟のことを心配して一緒に遊んだりですとか、近所といっても離れてはいるんですけど、土日でも自転車を使って２キロ離れた友達の家に遊びに行ったりというのが普通なんだよというのを聞いて、「あ、そうなんだ」と。大規模校ではなんでですかね、人数が多いからとか少人数だからというのも何か言い訳みたいになるかもしれませんが、なんでこんなにも違うんだろうなと思ったのが本当に印象的でした。大規模校で学年を越えて交流が出来るのかと考えてみたんですけど､私の小学校が全校生徒800人近くいるので、体育館に来て皆で鬼ごっこは出来ないだろうなと思って。低学年、中学年、高学年と２学年で遊ぶことは出来るかもしれませんが。小規模校では全学年で交流する、異学年交流の大切さというのをへき地実習を通して学ぶことが出来たのは良かったなと思います。

討論Ⅰ司会：西村

異学年交流とか人間関係を作る等について、岡嶋校長先生、学校を色々経験してからも含めてお話頂ければと思います。

岡嶋

どなたかのレポートであったと思うのですが、家族的な雰囲気とかなんとか書いていた学生さんがいたような気がするんですけど。大きな家族っていうか、そういう繋がりでいうとさっき言ったように、本校の子も何人か聞いて見ると、どっかの所のお友達の所に行って泊まったとか、もちろん兄弟関係も含めまして。基本的には、小さい時からもう既にそういうもんだっていう擦り込み状態じゃないですけど、世界に羽ばたくとか何だかって言いましたけど、私自身もこんな場で小さい学校で、こんな所で皆の前で発表するなんてまず絶対有り得なかったし、小中学校に行って高校なんて行ったら、一クラス40人いたんですけど、最初の頃一言も喋れませんでした。何故って、同じ学校から一人も行かなかったから、でもやっぱり誰か彼か喋ってくれたり、気の合いそうな人となんか喋れるようになったということで。子ども達を見てても、実はちょっとしか見てない人は、仲がいいよねで終わっちゃうけど、実は本音を言うと学校の中はドロドロしています。全員が仲がいいとはいえません。表面的には仲がいいです。皆で遊ぼうって、少ないから皆で遊びます。でも、一人ひとりよく見ていると、気の弱い子もいれば気の強い子もいます。色々な子ども達がいる中の学校です。勿論そこには親御さんもいるから親御さんとの関係もあります。色々なものを全部含めて、学校ではこういうふうにして育てようということをしていかないと、ただ仲いいですよではないです。やっぱりそういうところを見ながら、教師もやはりそこを意識しながら子ども達を見ていかないと、それに流されてしまう。そうなると子ども達仲良くしましょう、例えば１つの何かを教えるというか、子どもを育てようと思った時に、「はい仲良くしましょうね」で、素通りしちゃうと本当の仲良しにはならないと思います。ですから、そこのところの見極めは、それぞれ今の担任の先生方、先程落合小学校の方も、きっと一生懸命その子ども達を見ながらきちんと指導されて、いい学級経営されてると思います。そういう部分の経験をお聞かせ頂くことが大事だと思います。基本的にはやっぱり大きな家族だから、その中では色々なものが入っているのではないかなと思います。私は小さい学校で、いじめられはしませんでしたけども、高学年の時に、凄く恐ろしいお兄ちゃんというふうに思った中学生も中にはいました。そういうふうな色々な経験をしながら今があるかなというふうに思います。

加賀谷

私は小さい学校といっても複式を受けていた程ではなくて、今は準１級くらいにはなっています。へき地校１級か準１級くらいの小学校、中学校で、私は幼稚園から中学校３年生まで全員関係が変らない環境で育って、町には高校がなかったので必然的に中学校３年生までという環境で、幼稚園から中学校３年生までを過ごしました。その当時は考えていなかったのですが、今振り返るとおっしゃっていたように、凄く辛いことも沢山あったなあと思ってます。やっぱり関係が変らないので大規模校の人にとって見れば、「全員が幼なじみなんて凄く楽しそうで仲良さそうだね」と言われますが、結局関係が変らないので逃げ場がないというか、逃げたくなっても出来る場所がなくて、もし一度キャラクターが決まってしまったら、そのキャラクターを崩すことはもう永遠に出来ない。私はとても明るいキャラで馬鹿なことばかりやってるキャラクターの人で、明るくて良く笑う子でしっかり者というキャラクターでしたが、実際はそんなに明るくなく、疑問を持ちつつずっと生活をしていたので、高校に入って、今まで１クラスしかない学校で中学校３年生までを過ごしたんですが、高校に入ってＦクラスとか１学年６クラスある高校に入った途端、私のキャラクター全く180度変わって、凄く大人しくてあんまり喋らないキャラクターに変わりました。やっ

【加賀谷美安】

ぱり関係が変らないっていうのは辛いことだなと思っていて、それはお互いにそうで、相手のことを分かっているようで分かっていなくて、「あの人はああいう人だから」というイメージで完全が付いてしまっているので、それは自分も相手もそうです。だから例えば、一度「あの子はスポーツが出来る人だ」とか、一度「あの人は頭がいい、あの人はあんまり勉強が良く出来ない」というキャラクターが出来てしまうと、やっぱりそのイメージから抜け出せなくて、そうすると自分がクラスの中で勉強が出来ない立場にいるというのがあると、もう諦めてしまう。自分はそういう立場だからというのがあるので、やっぱり勉強に対して諦めてしまうだろうし、人間関係を嫌だなと思うことがあっても、やっぱり諦めてしまうところが、凄く小規模とかへき地の悪い点のひとつかなと思っています。

もう一つ、地域のことですが、私もスライドの方では地域との結び付きの強さが重要だと言ったのですが、逆に視点を変えると、地域に縛られているというか、地域から抜け出せないみたいなところもあるのかなと思います。やはり小規模へき地だからこそ関係が変らないのは児童・生徒だけではなくて、大人同士の関係もそうで、私も子どもながらに親同士の関係を嫌なドロドロとした関係を見てくると、結局子どもにも大きく影響があって、ある意味大規模校だと、例えば親同士が仲が悪くてもそこまで子どもに響かなく、仲良く過ごせたりするのかなと思うんです。へき地だったり環境が狭いと、あそこの家はこうだというのがやっぱりどうしても入って来てしまって、子どもの環境にも人間関係にも影響しちゃうのがあるので、当たり前なことですけれども、いいところと悪いところと半分半分だというのが私の印象です。

松野　孝（へき地教育アドバイザー 釧路校）

全く視点を変えて、平岡先生の質問がとても難しかったので、釧路校は、１週間実習と２週間実習をやってまして、実は２週間実習と平岡先生の質問がちょっと似ていたものですから、３年生か４年生のどちらかに答えて欲しいのです。研究授業に行くと必ず主免実習が終わっているから単元、その教材の、例えば３年生の算数のある単元の流れとか単元計画、それと子ども観と書いてある。非常に立派な指導案を書いているんです。それは主免実習でやっているからです。主免実習で書きますよね、単元計画を。だけど授業が成り立たない。せっかく主免実習やってきて、そして小規模校に行った時に単元計画を作って、何か違うものを感じていると思うんです。作りながら。そこのところを先程の教材との繋がりという言い方をしたのですが、どうでしょうか。同じ単元から単元計画を作ってて、さて本番やる、大学から先生が授業を見に来る。さあ、その教材を単元の中に何か主免との違いを感じてますか。感じたことがあれば教えて欲しいです。いい答えは期待していませんので、本音で語って欲しいなと思って、３年生か４年生の方。

討論Ⅰ司会　西村

３年生、４年生、こちら３名ですので、勝谷君いいですか。

勝谷

主免実習の単元計画作成と、へき地実習での単元作成計画作成での違いでいいですか。そんな大きな違いは自分としてはそんなには感じなかったんですけど、なんか子どものことを考えた時に、主免実習の時はやっぱり１学級が30人から40人ぐらいいて、どうしても全員のこと考えてるんですけど、やっぱりどっかで全員見れてない自分っていうか、描けてない自分がいたんです。へき地実習に行った時にはやっぱり１学級少ないということもあって、一人ひとりの子どものイメージが本当にしやすいなというか、主免を終わってから行ったというのもあるかもしれないんですけど。自分が作ってて思ったのは本当に一人ひとりの子どもの反応が、たった２週間だったんですけど、凄く考えられて、その子どもが分かるためにどういう計画にしたらいいとか、計画の中でちょっと工夫しなくちゃいけないなとか、その手立てを考えたりすることが出来たので、主免の時に感じられなかったことをへき地の単元計画を作った時には、自分は感じることが出来ました。

討論Ⅰ司会：西村

ありがとうございました。まだまだ学生に聞きたいことあると思うんですが、ちょっと時間の方、ここで区切りをつけたいと思っております。学生の先程の６組のレポートの中に凄い光る言葉が沢山ありまして、例えば学習指導に関してはですね、子どもって１番大切なのは授業だと、それをちゃんとしたいというような話がありました。じゃあどう指導するのかっていうのは、学生さんがこの後の勉強にもかかるなと思います。６組の学生の皆さん色々前に出て発表頂きまして、ありがとうございます。感謝の気持ちを込めて拍手でこの会を終えたいと思います。どうもありがとうございました。

総合司会：廣田

シンポジウムの第Ⅱ部を行います。５分間程配置を変え

【勝谷涼太】

る必要もありますので、45分から再開をしたいと思います。よろしくお願い致します。

パネルディスカッションⅡ

討論Ⅱ司会：廣田

それでは第Ⅱ部のシンポジウムを行いたいと思います。第Ⅰ部がどちらかと言いますと、実習そのものについてご意見等を頂いたのに対して、この第Ⅱ部は、もう少し広い立場から、北海道教育大学で行われているこの実習だけではなくて、今後のへき地・小規模校教育、あるいは教育養成、そういうことも含めて少し議論をしていきたいと思っております。そのためにHATOプロジェクトで、へき地・小規模校教育についてご一緒に研究させて頂いている方々と、それから長崎大学で、同じように離島教育を抱えている方からご意見を頂くことになると思います。今からまず最初に、７、８分で結構でございます。この実習の制度、あるいはやり方、こういうものを見ながら何か面白いところとか、もうちょっとこういうところを、の方が面白いんではないかという意見をいただきたいと思います。学生の学びを見て、こんなところにもうちょっと注目して伸ばした方がいいのではないか。あるいはそれぞれの大学で取り組まれている様々な取り組みと比較しながら、色々な視点を提供して頂ければと思っております。パネルディスカッション、４名の方にお願いしております。１人ずつ発言の前に紹介させて頂きます。まずは平岡先生、長崎大学の先生でございます。よろしくお願い致します。

〔話題提供者〕

平岡　賢治　氏　　長崎大学　教授

長崎大学の平岡と申します。よろしくお願いします。長崎大学に勤めてちょうど15年目になります。長崎県は北海道からは一番西に位置しています。はじめに長崎県について少し紹介をいたします。北海道の関係でいうと、長崎県はジャガイモの生産高が北海道に次いで全国第2位なんです。ジャガイモ畑も実際たくさんあります。しかし、よく調べてみると生産高の桁数が全然違っていて、北海道が約154万トン、長崎県は約６万トンです。ジャガイモの焼酎もあるし、出島という品種のジャガイモもあるんです。長崎県は本土と島、島は対馬、壱岐、五島列島などがあります。長崎県を地図で見ると「ハ」の字の形に見えます。東西および南北の長さはそれぞれ九州本土と同じくらいあるんです。だから、五島列島に行くのにジェットホイールで約１時間半、風が強い日には欠航することがあります。

【平岡賢治氏】

また、対馬や壱岐には長崎から直接は船では行けません。というより船が出ていないです。長崎からは、対馬や壱岐へは飛行機（プロペラ機）が飛んでいます。これらの島には、船で福岡（博多）から対馬や壱岐に行くのが一番近くて、学校の先生方も教材や本などをどこに買いに行かれるかというと、福岡（博多）に行かれます。だから、感覚的には福岡県対馬（壱岐）市のような感じになっています。

ところで、長崎県は複式学級が北海道、鹿児島県に次いで全国３番目に多い県です。具体的には、2013年度の複式学級を有する学校は、長崎県が228校、岩手県は222校、福島県が203校となっています。また、ご承知のように北海道は783校、鹿児島県が509校です。また、学校の統廃合が行われると、また数字は変わってきますが。

長崎県では、小学校のほぼ４分の１の小学校に複式学級があります。長崎市は43万人あまりの人口ですが、それでも全小学校71校のうち11校に22学級の複式学級があります。対馬市は23校中15校に33学級、壱岐市は18校中９校に19学級の複式学級があります。私自身、教科教育の担当として算数科の複式の授業研究会に伺うことがよくありますが、参加するためには研究会の前日に伺うか、研究会当日に１泊して帰るということになります。変な言い方ですが、１時間の授業参観および授業研究会を行って、前後２泊することもあります。天候によってはそれでもいけない可能性があるような地域性があります。

次に、複式教育と大学との関わりについてお話をします。長崎大学の附属小学校には2004年に１・２年の複式学級を、翌年の2005年には３・４年の複式学級を、そして2006年に５・６年の複式学級を作りました。１学年８人で男女それぞれ４人からなり、１クラス２学年16人学級で、複式授業を行っています。国社算理、家庭、生活の一部を学年別の授業で、その他の教科がA・B年度で授業をしています。と同時に、間接指導を積極的に取り入れて、先生方は授業に取り組んでいます。大学として複式教育の取り組みは、2005・2006年に鹿児島大学教育学部・琉球大学教育学部および長崎大学教育学部の三大学連携事業として文部科学省からの支援を受けて「新しい時代の要請に応える離島教育の革新」というテーマのもとに連携・協力して共同研究を進め、複式教育の在り方等に関する基礎的研究を行ってきました。その当時からへき地研の先生方には大変お世話になりました。長崎をはじめ、沖縄や鹿児島にも遠路来ていただき、複式授業の進め方や取り組み方について多くの示唆をいただきました。教科教育の立場からどのように対応すればいいか、当時の私にとっては一番の心配でもありました。その当時のへき地研の村田文江先生に、「先生、複式授業って何ですか？　何をすればいいのですか？」とお聞きしたことがあります。すると先生は「単式授業と一緒、教師の授業力です」と答えられました。この言葉は、当時複式教育にかかわることに不安を持っていた私にとって、目からうろこでした。「そうか、これなら私でも関わることができる」と思いました。いろいろな複式

に関わるもろもろのものがあります。しかし、つまるところ先程少し述べましたが、「授業力」「教科力」それらをどう付けるかということに尽きるというお話をお聞きし、複式授業は授業の展開に濃淡をつけ、できるだけ単純な展開にすることで、子ども達の活動を促すことができるというように考えるようになりました。普通の単式授業について考えると、いろいろな飾り物をした形の授業展開が行われていますが、複式授業では、それをばっさ、ばっさと切り取って、きれいに単純にしていけばいいんだなと考えるようになり、現在の複式教育に関する授業や実際の複式の授業研究会などでの基本的な考えとしています。

学部の離島教育につきましては、附属小学校に完全複式学級ができ、先ほど述べた３大学の連携を始めて、2回目の2007年度から学部生の離島実習をはじめました。学部のカリキュラムの中に、１年生で附属小学校・附属中学校の参加観察実習を、２年生で附属特別支援学校、附属幼稚園の参加観察実習、３年生で主免・副免の教育実習を、さらに蓄積型体験実習としてインターンシップ、離島での体験実習、企業での体験実習、ボランティア実習、学習支援、イベント実習野外体験実習など多様な体験実習を経験するように組んでいます。

その中の１つとして離島・へき地実習があります。初年度は40人近くの希望者があり、五島、上五島、壱岐、対馬の合計９つの小学校に行きました。と言っても、それぞれの小学校に学生が行くといっても、実習校を決めるまでの過程がなかなか大変です。まず、市教委や町教委にお願いをして、それぞれの小学校の校長先生に受けてもらうことになりますが、学生達の宿泊所が、これまたなかなか難しいんです。しかし、上五島にある町立浜ノ浦小学校の近く、歩いて５分もかからないところに町立の海洋少年自然センターという宿泊できるところがあります。ここは現在も30人余りの学生が毎年行っています。その他は、民宿や先生のお宅に泊めていただくような場合もあります。

最近は、五島や上五島に行くにはジェットホイールで約１時間半、その他の経費も沢山かかるので島地区を少しずつ減少させて、北海道と同じように地続きの島原半島にある学校に、本年度は４年生63名の学生がお世話になりました。４月当初に説明会を開き、各市町の教育委員会にお願いをして配属を決定し、９月から11月の間で実習を行います。５年前ですかね、この時期にインフルエンザが流行り、街から隔離されたようなところに長崎から学生が実習に行って、一気にインフルエンザが広がって、そのため学校閉鎖になったということもありました。その原因は学生にあるかどうかはわかりませ先生方や保護者。地域の方のご協力をいただき、後日に延期をして実習したこともありました。このような事例もあり、１週間余り宿泊すると体力が持たなくて、疲れがたまりこのような病気が心配になってきます。そのため、実施要項にはインフルエンザの対策も１項目追加しています。

このような形で離島実習を継続して行っているというのが現状です。少し長くなりました。これで終わります。ありがとうございました。

討論Ⅱ司会：廣田

ありがとうございました。北教大もなかなか開拓が大変なんですが、OBの先生方に頼んだりしてやったりしています。釧路校では生活用品が一式ありまして、大学が教員住宅に運びながらやっております。

次にですね、愛知教育大学から中妻先生よろしくお願い致します。

〔話題提供者〕

中妻　雅彦　氏　愛知教育大学　教授（HATO連携大学）

【中妻雅彦氏】

よろしくお願いします。愛知教育大学の中妻です。私の大学、愛知教育大学は、へき地・小規模校の教育には、全く大学としては関わりを持ったことがない大学です。HATOプロジェクトにあたり、何か関係がある大学の教員はいないのかということで引っ張り出されてきたわけです。実は先日、これに参加するということで、愛知の小規模校が集中しています、三河地区の長野県寄りの所に行って参りました。黄柳川小学校という、もう統合した学校。これから統合を予定されている、鳳来寺、鳳来寺山という仏法僧のお話で有名な所、鳳来寺地区の４校を見て参りましたけれども、なかなか厳しい状況の中でこれからどうするかということを感じました。

今日の発表と、それから私が、一昨年まで厚沢部町の小学校へ３年程続けて、教員の授業研究とか、研修のことを調べさせて頂いた時に、桧山は100％へき地・小規模ということですけれども、厚沢部町も４校小学校がありますが、厚沢部小学校以外は３校、皆複式で、中学校１校というところです。そこと町外の先生方にアンケートをしました。東京のある市ですと、23区でないちょっと外れた所の住宅街にあります。それと静岡と愛知の教員の方のアンケートを取って比較をしたわけです。そうすると、東京は小さな市ですけれども、小学校が８校、中学校が３校ぐらいの住宅街がある小さな所です。静岡は静岡市と浜松市の間にある、中規模な市ですね。それから愛知県の大学のある市というふうに調べたんです。すると、厚沢部町の先生方の研修参加率というのが、非常に高いんです。飛び抜けてました。実践的な、教育委員会とか、公的な所がやるものへの参加以外に、自主的に自分で自腹を切って参加するという率が、厚沢部町の先生は40％近いんです。それから協同で何かを勤務時間外に研修に行くという率も非常に

高いです。大体そういう場合には、江差でやるとか函館でやることが多いらしいです。町内でもやってるらしいですけど。それと比べると東京の市の場合ですと、教育委員会の主催するものに関しては、参加率は非常に高いです。80％を越えてます。ところが自主的な研修となると、これはもう10％切るんですね。厚沢部小学校には何回も伺いまして、校長先生を含めて教育委員会の先生方とも話をしたり。校内の授業研究は、皆が参加するんだという言い方をするんです、皆が話すから。私も授業研究会を見せて頂きました。先生の数が学年に１人に校長先生、教頭先生がいらして、加配の先生とかいらっしゃるわけですから、大体11人から12人。そうすると皆さんが授業について発言をするわけですよね、あーでもない、こーでもないという。言ってみれば、昔、私が東京の小学校の教員をずっと長い間27年していて、今愛教大に移ってるんですけども、昔の20年30年前の学校の授業研究会の雰囲気というのをそこで感じるんですね。そうすると、小規模校が持っている良さというのは教員の研修、これは自立的に自分達で進めていかないといけないわけですけども、それに対して、非常にいい影響を及ぼす何かがあるんではないかなと思っております。

それからもう１点は、先程学生さんの発表の中の、共同生活をする、非常にそこがいい。これは、学生の実習にとっても合宿をする、生活を共にするということでの、共同性が非常に高められるのではないかと思います。これは小規模校の先生や学校で言えば、教職員の同僚性の問題と同じだと思います。ここが、今、教員養成の中で１つの鍵なのではないのかなと思っています。私は教職大学院の専任教員ですから、学部の学生を１人も教えていません。30人前後の基礎領域、ストレートマスターと、県から派遣された15人ぐらいの応用領域の現職学生を教えているのですが。30人ぐらいの教職大学院の院生は、100％教員になりたいということで入ってくるんです。学部の場合は色々いると思います。ですからこの人達は自習室にいるとうるさいんですね。何がうるさいかっていうとですね、勝手に面接の練習をしたり、教員採用の勉強ばっかりしてると困っちゃうんですけども。模擬授業の教材の話なんかになると、僕らは貸したくないんですけど、模擬授業室というところの鍵がほとんど返ってこないんです。守衛さんに預けて翌日また使うという感じです。そういう中で力を付けてきている、あるいは気持ちを高めています。それでこのへき地校実習の中に、私がさっき質問したように、良さを感じます。これが発言して下さった学生さんも１人で抱え込まないで皆で共有する、一緒に話し合う、子どもの姿を。それが学校には必要なんです。大規模な中で教員養成されて、学校自体も情報公開だとか人事公開でもって、１人の、個の力を凄く強調される中で、実は一緒に何かをするということで、同僚性とか協同性を大学のカリキュラムの中で実現していることが、非常に意義があることと感じています。

討論Ⅱ司会：廣田

ありがとうございました。同僚性を鍵としながら、この実習の中で共同生活をするというところにしてもらって頂いたところ、ありがとうございます。

それではですね、次に東京学芸大学の鉄矢先生からよろしくお願い致します。

〔話題提供者〕

鉄矢　悦朗　氏　東京学芸大学　准教授（HATO連携大学）

東京学芸大学の鉄矢と申します。よろしくお願いします。皆さんの話聞いていて、興味深いので絡んだ発言をしたいのですが、難しいの私の話をさせていただきます。

【鉄矢悦朗氏】

まず自己紹介は、カミングアウトから始めます。教員免許を持っていません。大学で教える前までは一級建築士として自分の建築事務所をやっておりました。12年前に学芸大に入りまして、12年間教員養成を熱心にやっております。建築事務所やっていた頃のことで、今も忘れられないことは、建築がいっぱい壊れてくとか、街というコミュニティーの仕組みが崩れていくとか、何が悪いんだろうと考えたことです。建築にそこを救う力があるのか。建築だけでは救えない。あと、何が問題か、そうか教育が悪いんだって考えになったんですよね。教育が悪いからこんなに日本が崩れていくんじゃないかとか、町の景観が悪いんじゃないのとか、あんなにポスターがいっぱい貼られる街並みになるんじゃないかという考えになったんです。じゃあ建築ではなく教育をデザインしよう、しなければって気になってきていた時に、公募を見つけ東京学芸大学に入ることになりました。現在、学芸大学で私は外から大学を見て仕事をしているつもりです。教員養成の流れから入ってきた人間じゃないので、外からの眼で見続けることが大事だと思っています。また、めげない性格も功を奏します。いつもいろいろ（大学に）投げ付けていますが、跳ね返りもたくさん飛んできます。相手にダメージを与えるのと同じぐらい、自分も結構ダメージをくらっています。でもやらなきゃと、そのような活動をやっております。

今HATOプロジェクトでは、教育環境支援プロジェクトの担当をやっています。文科省への申請当初から、プロジェクト名に「教育困難」というキーワードが付けられてしまいました。スタート時は、「教育困難校プロジェクト」という名称となり、研究フィールドとして対応してくれる中学校にはとても言いにくいものでした。書類はずっと、教育困難校プロジェクトと出るので、非常に辛いところは

今も残っている状況です。東京は北海道と比べるとかなり小さいですけれども、学芸大学は東京の西の方に有りまして、東の方の学生ボランティアなどが手薄、少ない状況なんですね。さらに、東の方がやんちゃな子どもが多いとも言われています。成績がよろしくないとも。そんな西と東に差があるらしい状況の中、東京学芸大学は、東京って名前が付きながら西の方で教育実習やってるだけじゃ駄目だろうと、少し現代的教育課題のあるところでやらなきゃいけないだろうという個人的な見解の背景があり、この教育環境支援プロジェクトをしています。たとえば、墨田区のN小学校は、日本語を母国語としていない子どもの割合が、既に40％近くになっています。その子ども達は、普通の日常会話が出来るので、先生方は、大丈夫、問題ないと思い込んで指導をします。しかし、授業についていけなかったり、授業を妨害する側に入ってしまったりする。残念なことに知的な成長に問題があるのではないかと疑ってしまったりする。しかし、専門的な目でよく見るとやっぱりわかるそうなんです。作文を書かせると「がっこう」が「がこう」となったりしているそうです。つまり、会話ではなく文字化した日本語、問題文などを読んだりする力が適切に育成されていない状況だったそうです。教育環境支援プロジェクトにはこういうJSL（Japanese as a second language）という専門の先生にもメンバーに入ってもらっています。日本語を母国語としてない子ども達をどう見つけて、国語力、言語力がないから、テストが分からないっていう状況を改善の方向へしていくか、JSLの問題をどう考えていくかという活動ですね。今、幼小中連携という形で墨田区の様々な学校にも出入りしております。実は保育園の時代からJSLの子たちは日本語が上手くなる。普通日常会話は出来るころ、ちょっと考えを深めるとか、幼稚園、小学校で言語を使いながら人間として理論的に考え、人と話す段階に、先生が文字についていけない状況を見落としてしまっているために、その子が課題を抱えしまう。そのほかにも、小学校で九九につまずいた児童をそのままにしたまま、中学生させてしまっている場合もあるそうです。九九に課題があるのに、中学校の数学の授業を黙って静かに見ていろというのも難しいです。しかし学習規律のためには座ってろと言う、座ってなさいって言われても、無理なので教室を脱走してしまう。あるいは、自分が解っていないことを隠したいから授業を妨害するという行為も生じています。今回のプロジェクトではそこにうちの学生達が入って、静かにサポートすることもあります。この教育環境支援プロジェクトは学校の先生が自分の学校を立ち直らせることを支援したいのです。うちの大学生が入ったから立ち直ったのではなく、先生方には、俺達がやったんだぜっていう気になって欲しいなと思いながら、すごく難しい立場での支援をやっています。

このような学芸大のHATO教育環境支援プロジェクトを進めながら、教育環境というところでも私はこちらのへき地校・小規模校のプロジェクトにも手を挙げて関わっております。東京都にも島嶼部がありまして、こちらもへき地校となっております。学芸大学の教育実習（４年次の応用実習）でこれらの島実習を選ぶことが出来ます。東京都教育委員会を通して島で実習を受け入れてくれる学校を探してもらうと、最近は大島と八丈島の学校が手を挙げてくれています。１学年1000人ぐらいいる学芸大生を対象に、大島が２人、八丈島が２人という受け入れ規模です。学生に向けて募集をかけると約4倍の16名ぐらい応募してくるという状況だそうです。応募学生の中からやる気などの意気込みレポートによって決まるという仕組みとなっています。寮などがあるわけではないので、学生達は最初から民宿に泊まることになっています。それも２食付で。自炊は、勉強する時間が足りなくなるから、２食付の民宿に宿泊するという約束で行っているそうです。大体２週間の実習で14万円ぐらいかかって、飛行機で行くと更に往復で３万円かかっているので、約20万円は必ず準備していけという、それでも行きたい学生が行っているのがうちの島実習です。

小さな学校を経験するというのは、私は、非常にいいことだと思っています。特に教育の多様性を理解するためにも。学芸大学を卒業すると、東京を知っていることイコール日本の教育を知っている気になってしまう、それが怖いです。そのような気持ちもあり、私は、自分の研究室のゼミという形で地方の小さな学校に押しかけ授業なんかをやったりしています。

「なぜ教育のことをやっているのか」というと、デザインをやってきたことが深くかかわっています。デザインを通じて、相手の立場になって考えるっていうトレーニングを私が数多くしてきたんだと思います。たとえば建築設計をする時にクライアントとしゃべりながら、この人はどうやったらこの案をフッと受け止めてくれるんだろうと、相手の立場になろうとする。スッと腑に落ちるような提案となるには、何回かコミュニケーションをして、本題までが長すぎても、短すぎても困るんです。短い間に附に落ちる案を出すとその人は疑うんです、本当かなって。適切なタイミングで提案を出すと「それが言いたかったの」ってクライアントが考え付いたような話になって、話が進んでいくんです。こういうデザインのプロセスが凄く教育に似ています。空間や建築なんかのデザインを考えますと、やはりどんな空間を作りたいのか、どんな時間を作りたいのかって、いつも相手の気持ちを考えています。いまは、これらの能力を使って、学生たちの「どういった授業をデザインしたいのか」「どんな時間にしたいのか」ということを問うことをしています。

最近よく学生に言っているのが「教員になるっていう理由が何なのか」です。「教員という手段をあなたは獲得した後、何をしたいんですか」って。先ほどの質問もそうなのですが、教員になるというのが手段なんですね。その向こうにある目的を教員養成としても考えさせないといけないんです。教員採用試験を落ちた学生も、教員にならな

かった学生がどういう手段で何をしたいのかっていうこと問い、考えるから、先生とは違う道から目的の方へ達してもらうっていうのが凄く大事だと思っています。教員を経験した人間が教員の次に何をやるのかとかも考えてほしいです。管理職を目指すとか、さらには何がしたいから管理職をやるんだとか、教育委員会に入るって、何をしたいから教育委員会に入るんだと、そこまで考えたり、そういうふうに自分がやりたいという希望を強く持たせることが、実は教員養成大学のミッションだと思っています。教育の先にある自分の生きる哲学というんでしょうかね、目の前の教員養成、教員採用、あたかもそれが目的のようになりそうなところに、ちょっと不安を感じております。

討論Ⅱ司会：廣田

ありがとうございました。デザインはっていう話は、なかなか大変に参考になりました。

それでは大阪教育大学から、馬野先生よろしくお願い致します。

〔話題提供者〕

馬野　範雄　氏　大阪教育大学　准教授（HATO連携大学）

大阪には離島はありません。それからへき地校もないです。離島もなくへき地校もない大阪教育大学の私が、なぜここに来ているかというと、特色ある小規模校実習を行っているからだと思います。これまでの実習というのは大学から、実習生をお願いしますというスタンスです。教育委員会、あるいは学校、校長会等に挨拶に行ったり、お礼を言って帰ってきたりして、実習生をお願いしますというスタンスですね。学校の方は忙しいけど受けてあげるよという関係だったように思います。これからは、地域で教員を育てていく、地域で教育を作っていくという、連携というか共同で、地域の教員は地域で育てていくんだというスタンスをつくる、そういう関係を作っていかないといけないなというのが、今の私たちの思いです。

【馬野範雄氏】

大阪の教師は、今残念ながら大変しんどい思いをしています。給料は全国ナンバー1で低い。大変しんどい子どもたちも多い。東京の話もありましたが、大阪もなかなかのものです。そんな中で大教大生の大阪離れが進んでいます。府教委からも市教委からも、「大教大生はなんで大阪に来てくれへんねん」と言われています。そういう中で、あえて実習を充実したもの、質保証をしていこうと動いています。とりあえず４年で卒業したときに、ある一定の実践力というか教師力というか、そういう力をもって卒業させたいというのが私たちの思いです。

どこの大学でも、４年間の教育実習をそれぞれ工夫しながら実施しているところだと思います。うちの大学でも、１回生は観察実習ということで、２日間「出会い」ということで、近隣の小中学校にお邪魔します。２回生は選択ですけれども、体験実習ということで「感じる」というテーマで、９月の終わりぐらいに運動会のある学校に、お手伝い実習という感じで１週間行っています。今日紹介します遠隔地実習というのは、この２回生の体験実習の中に入っています。３回生の基本実習は４週間で、「考える」ということで授業実践を大きなテーマにしています。４回生は選択で、「高める」というテーマで、自分の問題意識に基づいて、自分の希望する地域、希望する教科の優れた教師のいる学校に行くようにしています。

今日、話題にしたいのが体験実習のプレミアムとして行く遠隔地実習です。２回生の体験実習は、近隣の小中学校で行う１週間実習と、地方の小規模校で行う２週間の遠隔地実習に分けられます。遠隔地実習では、長野県の白馬南小学校という山の学校、愛知県の佐久島という島の学校、それから人権教育をテーマにして取り組んでいる三重県の川口小学校という３校に実習に行きます。１校に６人から９人ぐらい、全部で20人ぐらいですね。希望者ですから例年40数名のぐらいの応募があって、そこから面談をして、この子だったら遠隔地でも大丈夫だろうという学生を選んで行かせています。目的の一つは専門性の獲得です。よく言われる専門性は、児童・生徒理解、教職理解、教材理解ですね。それから授業実践あたりがよく言われるところだと思います。もう一つ付け加えたいのが地域理解です。大阪の学校で４週間実習しても、学年３クラス、４クラスという大規模校では、なかなか地域が見えてきません。その中で地域理解っていうのは、これから絶対必要ではないかという思いがあります。

もう一つの目的は、人間性の獲得です。専門性の中に人間性も入っていると言われる方もおられるかもしれません。先ほど、同僚性が非常に重要だという話をしていただいています。PISAの学力観ではありませんが、やっぱり主体性と協働性・同僚性という側面と、これまでの知識や能力をフル活動して、いろいろ工夫して新しいものを提案していくというか、作り出していく創造性、そういう資質・能力がやっぱりいるんじゃないかと思っています。

専門性や人間性は決められた枠の中でだけじゃなく、いろんな意味で冒険的な環境の中で培われていくものだと思います。限られた人数、限られた学校での実習ですから、いろんな学校に行って、そこでの経験や知見を交流し合って、高め合っていくことが大事だと思っています。

本学は教員養成課程だけで500名いるんですけど、今お話した２回生の体験実習はそのうちだいたい150名から200名が参加しています。その中でも20名程度が遠隔地実習に

参加しています。この体験実習を必修化したいと考えています。必修化すると、とんでもない学生も実習に行ってしまう、トラブルが待っているという気もするのですが、…。３回生の基本実習で、不登校というか学校に行けなくなる学生がいたり、自分は教員になる気はないんですというようなことを公言してはばからない学生がいたりします。２回生でもう少し体験的な活動をして、先生や子どもたちと汗水流して働くことを経験していく中で、そんな言葉が出てくることはなくなるだろうと期待し、教員養成の一つのステップにしたいというのが、必修化への思いです。

500名の学生を学校がどう受け入れてくれるのか、いろいろ問題があるのですが、大阪教育大学としての改革の方向性として、進めていきたいと思っています。この体験実習、特に遠隔地実習に参加した学生はそれだけで終わらずに、オープンキャンパスや後輩へのガイダンスでのプレゼンを課しています。入力としての実習で終わらずに、出力としての発信も実習の中身だと考え、しっかり働いてもらおうと思っています。

討論Ⅱ司会：廣田

ありがとうございました。４人のパネリスト、それぞれ色々なことをおっしゃいましてですね、司会に任せろと言われたんですけど、司会任せられませんでした。そこでですね、時間が後10分しかないということもありますので、今のお話を聞きまして、こんなところもうちょっと突っ込んでみたいなだとか、あるいはこういうところを交流してみたいなとか、思われるところがあったらこの際自由に。ある意味、雑談的になっても構わないと思うんですね。さっき最後に先生に言われましたけど、色んな意見とか視点が交流されることが新しいものを作っていく可能性があるということで、ちょっと言い訳めいてますが、是非ご意見の交流をお願いしたいと思います。勿論これは４人の中でも、こんなことちょっと聞いてみたいなということで、ここの前にいらっしゃる４人の間でもお話をされると、嬉しいかなと思います。というわけで、まずは口火を切って頂ける方、いらっしゃいますでしょうか。

はい、では玉井先生どうぞ。

玉井　康之（北海道教育大学　釧路校　教授）

北海道教育大学の玉井と申します。それぞれの先生方、大変勉強になりました。中妻先生が協同性が大事だということで、これは私も授業の中でグループワークをした時に、例えば遅刻をした時も、全部グループで個別の名前を取らないで、誰か遅刻したら全部連帯責任だぞと。いや、そんなこと困るって言ったら、私はそういうことを呼びかけるのも教師のやっぱり資質だよと。それをやっぱり皆で支え合って、駄目な奴も全部引っ張り上げろと。そういうことも言ったりもしまして、ここも１つ私も大事だなと思います。

馬野先生から地域理解の話がありました。これも本当に

【玉井康之氏】

大阪も北海道もですね、この地域的な階層性の問題も凄くあって、ここも背後にある子どもの生活や、やっぱり家庭も含めてこれも理解すること、こういうこともやっぱり必要だなというふうに感じました。

これは鉄矢先生が、東京を知ってると、皆それが全部普遍的だというふうに錯覚してしまうという話がありました。本当に色んな地域性があって、やっぱりそこの特色って非常に大事だなというふうに思いました。

平岡先生、島の話をされたんですけども、通えない島とちょっと通えるへき地とでは、同じへき地でも、これ例えば人事の異動の仕方ですとか、どういう人を配置するかっていうのも、結構これやっぱり苦労するんじゃないかなと。やはりそれぞれに地域性があるんだなと。これをトータルに教員養成に全部入れるというのは、本当に大変な課題を我々背負ってるんだなというふうに思います。

北教大のへき地なんですけど、へき地を通しても、これは多様な資質を全国120単位の中に80単位は免許法で同じ科目なんですよ。だからどこの大学でも教員になるのは同じ科目取っても、同じようになる。だけどもそこの背後に様々な地域と、様々な資質を入れてかないと、やっぱりこれは子どもに合った教育が出来ない。それを育てる教員養成としてはですね、それを地域性ということを含めて、これを考えていかなきゃいけないということです。ここは私はそれぞれの先生方のお話を聞いて、これは多様な能力を我々はどうすれば育てられるか、非常に私自身が大変な課題をやらなきゃいけないんだろうなと思いながら、聞かせて頂きました。論点というわけじゃないんですけども、それぞれの先生方の話を聞いて、私が学んだ感想を述べさせて頂きました。ありがとうございました。

討論Ⅱ司会：廣田

ありがとうございます。どうでしょう。よろしくお願いします。

鉄矢

地域をどう理解させるかというのは、難しいですね。やっぱり学生も大学に入ったままになっちゃうので。紹介でき

ることとして、学芸大学からはNPO法人 東京学芸大こども未来研究所が生まれています。そこは「こどもパートナー」という認証を出しています。色々な地域のイベントをやる際に、こどもパートナーの人優先で有償ボランティアが出る仕組みを行っています。楽しいことが出来るとか、地域の子どもを集めたイベントをやるっていう時に、必ずそういうふうに声がかかるような仕組みになっています。また、おもちゃショーとか、色々な展示会なんかにもNPOが出ていますのでその時に、お手伝いという格好で出ていくというのがあります。そうすると、多様な教育産業に出会うこともやっております。

討論Ⅱ司会：廣田

NPO法人を作りながらやられている。多様な取り組みがあるようであります。

他に何か皆さん、ございますでしょうかね。

実は司会の私が、話していいかどうか分かりませんが、実は私がこちらに来た時から、ずっとへき地校実習に関わっているんですけど、その時に１つ、さっきの同僚性の話にも実は関わるのかも知れないんですけど、学生達、次第にこの積み重ねをやってきたので、ああいう形で発表をする、議論をするということが出来ては来てるんですけれども、実はそこの実習の中で学んだことをどう振り返るかっていうことが、実はさっきから挙がっている地域理解、その地域の影響をどう受けているかだとか、地域を作る主体をどうしたらいいのかとか。それから子ども達をどう見るのかだとか。勿論教える内容は、学習指導要領に沿うのですが、それを子ども達がどう掴んでいくのかっていうことは、結構多様な視点を持って、交流をしていかなきゃいけないような気がするんですね。様々な取り組みをしている一貫として、このフォーラムをずっと続けてきて、ここで交流はしてるわけなんですけれども、今皆さんのお話を聞いていますと、直接実習をしているところも、していないところも含めまして、こうした交流の中で、学生達がどのような視点を深めていくのかなということがあったら、是非私はお聞きしたいなという気がします。そしてその中で自由に感想とか出来る力っていうのか、どう作っていくか、今の学生達って凄く優しいんですけれども、相手のことを考えすぎちゃって自分のことを言わないなんてあるので、そういうことも含めながらこの実習、あるいはそれぞれの取り組みの中で、学生達の視点をどのように多様化しているのか、なんてところをちょっと皆さんにお聞きしたいのですが、よろしいでしょうか。

中妻

私はさっき言いましたように、学部の学生を全然持っていないので、一概には言えません。教職大学院の院生は愛教大の場合は、大体30人前後の基礎学生が県内の67校、４月から80校に、分かれて実習に行きます。９月から週２回、学校サポーターというのに行きますので、１年４ヶ月、同じ学校に行きます。そこに複数で行ってる学生もいるんですけども、大体１人なんです。そうすると、１人の学生が１つの学校にお世話になって、本当に良く育つんですが、問題は視野が狭いんです。愛知県内というのは、三河と尾張は別の県ですから。徳川家康と豊臣秀吉と織田信長の関係が出身地がちゃんと尾張、名古屋、三河って分かれてまして、名古屋は政令指定都市で秀吉が生まれて、尾張の清洲で信長が生まれて、三河の岡崎で家康が生まれると。このように非常に上手く地域性が出来ているので、県内の同じ実習校に行ってても、全く持ってくる文化が違うんです。それを大学の中で交流する場というのが、なかなか作れないというのが実情です。僕らもそのことをあまり良く分からなかったということもあります。それで意識的な取り組みとして、実習に行ってる学生同士で、基礎ゼミというふうに呼んでいるのですが、そこで実習の報告をして話をさせる場を作りました。そうすると、学生同士が驚くんですよ。「えっ三河はそうやるの」という話で。三河の中で西三河と東三河という、岡崎と豊橋では全然違うというのが分かってきている。そうすると、愛知県の教員になる学生が、圧倒的に多いんですけれども、県のレベルで全体として、あるいは日本全体で教育って、どういうふうに今考えるのかということについて、交流が段々出来るようになってきているかなと思っています。そう意味では実習が終わった後に、あるいは私は本当は実習中、実習やりながら話せるのがいいことだと思ってます。また、実習が終わった時に、実習に行った学生同士がお互いに交流し合う場っていうのが、必要なんじゃないでしょうか。それはまとめは教育実習をやって、報告書を書いたりしているのだけれども、実際違う地域に行った違う学生同士が交流するというのは、こっちの学部の学生見てると、あんまり感じられない。だから研究室の方がいいですよね。その辺をやっぱり工夫していくことによって、学生が学んできたことをお互いにシェアし合うというか、共有することが出来るんじゃないか。その中で広い視野を持つことができる愛知県は、名古屋市以外のところは、地域の中で地域の教員を育てたいという意識が非常に強いんですね。実習に来た学生が、その地域に就職してくれというのが凄く多いんです。そういう意味では、地域でグッと固められちゃうものを大学教育として、視野を広げていくってことが大事なんじゃないかなというふうに思っています。

平岡

複式学級は、島地区の色々な小学校や長崎市内にもあります。これらはすべて一緒ではない。それぞれの地域を抱え、子どもも同じ学校でも学年によって全部違う。授業もそうです。少なくとも私が小学校へ夏休みに行って、6学年分の研究授業の学習指導案検討を先生方と行うことがよくあります。先生方もベストでない、ベターでもない、悩みながら日々の授業をされて、これでいいのかという悩みを常に持って子ども達と接しておられます。先程、鉄矢先

生が言われましたけれど、「先生、ここの授業面白くないでしょ。」「そうなんですよ。」「これ何したいんですか？例えば､こういう方法もありますよ」「あー！　そうですね。やっと腑に落ちました」といわれる場面がよくあります。こう言われると先生の表情が変わり、学習指導案がガラッと変わります。そこでは、子ども達がいて、先生達の学習指導案があるわけです。今日の学生の人達は非常にいい発表をなされたんだけど、あなた達はそこで本当に悩んだの？　もっと本音で！本当にいい学校でしたか？　いろいろ悩みもあったと思うんですね。子ども達がいろいろ変っていく。先生達もいろいろ変っていく。実習の場合、授業でいいと思うんですけど、この授業で本当にいいのか？
このような悩みというものを常に大切にしていただければと思います。それが教師の原点だと私は思っています。附属で実習を受けてどうだったか？楽しかったとなかなか言いませんけど、嬉しそうな顔をして来る学生を見ると本当にそうなのかな？　と思うことがあります。いい授業は年に１つできればいいわけで、授業に取り組む姿勢があって、次のステップがある。そこの原点を、結局複式授業もそうなんだけど、単式授業というものについて考える。その原点を忘れずに実習に行ってもらえればいい。

長崎大学の学生も、上五島の浜ノ浦小学校に毎年30人くらいお世話になっています。11月のその地区の祭りに参加させてもらっています。実習が終わって学生達は、「祭りがよかった」「夜、地域の人たちと一緒に飲んで楽しかった」 本当だろうか？それはそれでいいんですが、地域の人たちが学校を支えて、学校の先生達がこれまで作ってこられた結果のものであることを、学び、授業で悩んでほしいと思っています。この原点がどんな形であれ、一番大事なんではないかと思っています。だから、常に悩むということ、原点を忘れないでほしいなというのが私の思いです。このことは学生達にも言っているところです。

鉄矢

学芸大全部ではないんですけど、私のいる美術科では、１年生の時にどうやって頭を美術でガツンとするか紹介します。こう浮いて来るんですよね、フワフワって、大学生になれたっていう感じの４月の時に。これは悪いわけじゃないんですけど、でも本当に面白い大学生になったんだよっていうのを伝えるということで、４月の終わりから５月の頭に、１泊２日の合宿を代々木オリンピックセンターで行っています。うちの学生の半分は田舎から来ています。友達には俺東京にいるよって言ってるくせに、小金井という東京の田舎で大学と家の往復、それじゃあしょうがないだろうっていうので、ちゃんと東京の真ん中に連れていくことも兼ねた合宿をしています。初日は図工のワークショップや子どものころの振り返り体験をやります。翌日はレクチャーとフィールドワークで、美を探して来い、スライド４枚でプレゼンテーションしなさいっていうもので、プレゼンは４時から始めると言って、朝11時から出かけさせて、青山。表参道の指定されたエリアのマップ中を歩かせています。グループで歩きながら「美って何だろう」って、やっと大学生として喋り始めるらしいです。同級生がこんなに真面目に喋ってくれる。高校まで美術をやっていましたと言っても、美の話をしたことない。美って何？って、自分の専門分野に関わる話をを思いっきり喋れるというのが凄く楽しい体験らしいです。たとえ喧嘩してグループの中で、意見が割れたりしても。プレゼンテーションでは、教員たちが凄く突っ込んで、美の議論を深めていきます。泣く学生もいましたが、美に対して真面目に話して､突っ込みのこっちも真面目に､美ってこうだろうっていう話とか。そして「これがこれからの大学生活で続くからよろしくな」「良く来た学芸大学へ」って歓迎する合宿です。１年生でやりますが、２年生の中には、もう１回同じような合宿をやりたいですというのが出て来たりします。

また、「ものづくり教育」っていう初等教育課程の選修を５年前に立ち上げて、小学校の中で実感を伴った教育ができる教員の養成を目指したものです｡名前は諸事情で｢ものづくり」っていう名前でやっていますが、内容は全科教員の養成ということでやっています。この１年生の春学期は、はっきりいってほぼ捨てているんですね。捨てているって言ったら語弊がありますが、待ちの期間なんです。１年生に向かって「自分で決めたプロジェクトをやんなさい、好きなことやっていいから。今まで高校で大変だったでしょ、好きなことやっていいよ」と言って。「そうですか、好きなことやっていいんですね」と言いながらも、好きなことが見つからない１年生が多い。この演習はチャンスなのに自分が自分の力で進めない感覚や動かないで考える日々を過ごしながら、だんだん７月終わりも近くなり、最終プレゼンの前になってくると、やっと何か探そうって自分で動き始める。とりあえず何でも、藁をもすがるつもりで何かのワークショップに出てみるとか、初めて動き出して、本当に興味のあるものは何だろうと本気で考えるようです。前期最終プレゼンでは散々な講評だったりもします。でも今度は夏休みに動くようになりますね。半期の待ちの姿勢が効いてくるんです。教員は５人いて、皆本当はアドバイスしたいんですけど「へぇーそれが好きなんだ、

やってごらん」それしか言わない待ちの指導をしているっていうのがありますね。

馬野

実習から帰ってきたら、複数のクラスに分かれて振り返るフレクションの場を大切にしたいと思っています。同じ講座だけでは実習内容がある程度限られてくるので、違う講座や教科と混じっている方がおもしろいなと感じています。多様な学生を集めてリフレクションを行っても、今後の課題としては、子どもの褒め方・叱り方、板書や指導案の書き方という指導技術に関するものが圧倒的に多いです。広壮な理念とは言わないけれど、実習について交流するだけではなく、自分はどんな先生になりたいのか、本質というか指針というか、ぶれないものをもってほしいと思います。「これから自分で自分を育てていくんだよ、どのようにしていくの」と問いかけ、話し合うセミナーのようなものができるといいなと思っています。そういう意味で、模索的ではありますが、それぞれの実習の目標にあった共通課題を組み込んだ教育実習ノートの作成を進めています。自分はこんな教師をめざして、こんなことをやっていきたいということを具体的に明確にできるようにしたいと思っています。

討論Ⅱ司会：廣田

ありがとうございました。司会が下手で時間がオーバーしてますが、まとまりませんでした。

実は私も今考えておりまして、時々、夜真夜中に電話がかかってくるんです。私夜遅くまで研究室にいるのが有名らしくて、今現職に付いている学生から「困っているので話を聞いて欲しい」という話なんですね。私はカウンセラーでないので、ただただ聞くだけなんですけれども、それで落ち着くんですね。落ち着いた後に「周りにちょっと話してみた？」とか、「それ校長先生に相談してみた？」とか、「家の中にいる人にちょっとその気持ちを伝えてみた？」と聞くと、それがなかなか出来ていない学生が電話をかけてくるんですね。悩みを持つというのは、とってもいいことです。うちの学生も結構悩みを持って問題意識を持ち出す。これが出発点だと思うんです。同時にそれをどう解決するかという時に、ひとりで抱え込んでしまうと、何でも内に囲ってしまう。それを色々な人から、あるいは色々な経験を持った人から議論することが出来て、自分の新しい方向性が見えていくということは、凄く大事かなと思います。さっきの電話をかけてくる学生は、へき地実習を経験していない人達です。だからスキルだけに固まってしまったり、あるいはその物を見たり、多様で皆で考えるという力をやっぱりこれから作っていくというよりは、この北海道の特性である、小規模校教育を進めながら、それをみんなに交流していく、こういう場を作っていくことがいいかなと思います。このへき地・小規模校教育フォーラムがそのひとつになることを考えまして、このシンポジウムを終わらせて頂きます。１番最後に４人の先生方に拍手をお願いしたいと思います。

最後にへき地部門の部門長であります、八木の方からご挨拶をさせて頂きます。

閉会あいさつ

八木　修一（へき地教育研究所支援部門長）

今日午後からではありましたが、６時まで第Ⅰ部と第Ⅱ部を通して、発表や報告、さらには交流を深めて頂きました。本当にありがとうございました。とりわけ学生の諸君、各キャンパス毎に報告会が既に終わっていたんですが、それをキャンパス間で交流するということで、今日報告がありました。その指示通りに適切にまとめて頂きました。ありがとうございます。尚、コメントを頂きました、北海道へき地・複式教育連盟の研究推進委員長であります、浜中町立茶内第一小学校の岡嶋校長先生、ありがとうございました。

いわゆる私達は“道へき”と言っておりますが、現場の先生方のへき地教育を勉強していく北海道へき地・複式教育連盟という大きな団体がございます。大学はここの“道へき”といつも繋いでおいて、いずれ学生が現場に行った時にこういう“道へき”に入って、また勉強していってもらえれば有り難いということで、岡嶋校長先生に来て頂きました。さらに、北海道教育研究所の渡邉研究主幹にも、本当に適切な助言を頂きまして、ありがとうございます。私達は簡単に道研、道研と言っておりますが、まさしく北海道の教育を支えている研究所でございます。従って、大学と行政機関と、このパイプを絶対閉ざしてはならないということで、今回も学生の発表の助言を頂いたところでございます。

第Ⅱ部の方につきましては、それぞれ長崎大学の平岡先生始め、HATOプロジェクトの中妻先生、鉄矢先生、馬野先生にもそれぞれの大学の情報を聞かせて頂きました。今日参加した学生は本当にラッキーだったと思います。普段はうちの大学の先生の情報しか入ってきませんが、全国の大学の先生から情報を頂いたということは、今日はいい勉強になったのではないかなと思っております。尚、実は参加者の中に、先程道研の渡邉主幹の話をしましたが、その上司でありますけども、北林企画・研究部長や、西出研究主幹も今日参加をして頂いております。北林部長には実は昨日HATOプロジェクトの企画で、私達北海道教育大学では複式学級における「学習指導の手引き」というのを作っていまして、来年４月から学生全員に持たせて実習にも行ってもらいますし、それからへき地教育論の授業でも使っていきたいと考えております。昨日部長の方からも色々とご指導を頂いたところでございます。

また、標茶町立標茶中学校の幸村教頭先生がおりますが、是非勉強したいということで参加をして頂きました。本当にありがとうございます。今日の学生の五十嵐さんの実習校である南富良野町立落合小学校の花井先生にも参加

【八木修一部門長】

をして頂きました。いわゆる実習生のことをここまで心配をしてくれているということは、本当に有り難いなと思っております。

今年度は全部で57校127名がお世話になりました。来年はどのぐらいになるか分かりませんが、そのうちの今日は８名だけ来て頂きましたが、是非、後輩達に繋いでいってもらえれば有り難いと思います。今回参加できなかった学生の実習手帳の感想を読ませてもらったら、複式授業の進め方について講義で聞くだけでなくて、実際に行って見て質問をすることが出来たので、とっても良い体験になりました。自分が学びたいことを考えながら実践できたので、大きな学びになりました。へき地の子ども達と実際に触れ合うことで、へき地小規模校の良さについても体験することが出来て良かった、とありました。２人目は、複式の授業の工夫や先生の大変さが、身近に観察する事が出来たとあります。また、子ども達と沢山関わることが出来て、充実した実習を送ることが出来た、教師になりたいという気持ちが高まった１週間でしたという感想もありました。今日発表した学生からも行って良かっただとか、ためになったという、感想がありました。実はその言葉を私達スタッフは聞きたかったというか、これのために私達は現場の校長先生にお願いに行ったり、教育委員会に足を運んだりと努力をしてきたんですが、その甲斐があったなあと思います。どうぞこれからもへき地のことを勉強して、現場に行ったらこの体験を生かして、子ども達のために頑張って欲しいものだと思います。

最後になりましたが、長時間にわたってご意見、発表を頂きまして、重ねてお礼を申し上げ、閉会の挨拶と致します。本日は誠にありがとうございました。

総合司会：廣田

これをもちまして、フォーラム全てのプログラムが終わりになります。どうもありがとうございました。